

カリタス女子短期大学の50年を振り返って

ubi
[Caritas
et amor


Iesus
ibi est

2016年

カリタス女子短期大学

『カリタス女子短期大学の50年を振り返って』

目次

<はじめに>		1
<写真で見るカリタス女子短期大学の50年>		
I. <カナダ・ケベックから日本へ>		
第1章 カリタス女子短期大学の50年を振り返って	クローデット・ベルニエ	2
第2章 カリタスのルーツを求めて	竹中 豊	7
II. <建学の精神を求めて>		
第3章 カリタス女子短期大学の役割と使命を考える	北川 宣子	12
第4章 マルグリット・デュービル列聖記念をめぐって/仏語科設置とその精神	稲葉 延子	15
第5章 爽やかに「野菊」の如く50年 ~キリスト教人間学と聖マルグリット・デュービルの精神~	浦野 洋司	20
第6章 学生の活動について	伊藤 知子	24
第7章 地域との絆を求めて	加藤 美保	28
III. <特別寄稿>		
第8章 すぐれた伝統を受け継いだカリタス女子短期大学	小林 順子 (清泉女子大学名誉教授)	32
IV. <国際性を求めて>		
第9章 語学力を実践的に生かす機会を求めて —英語圏への留学から—	北川 宣子	38
第10章 フランス語・フランス語圏文化 —留学と編入学。続ける学び。内なるカリタス—	稲葉 延子	43
第11章 多様性からの学びあい—国際ボランティア・海外体験留学、そして国際交流フォーラム—	竹中 豊	47
V. <もうひとつの視座>		
第12章 カリタス女子短期大学に勤務しての“発見” —公立校との比較の視点から—	阿部 侃壽	52

VI. <カリタス女子短期大学 50年のあゆみ>

1. 短大のあゆみ (年表)
2. 本学の教育研究活動 テーマ
3. 全学講演会 テーマ
4. 国際交流フォーラム テーマ
5. 静かに考える会 テーマ
6. クリスマス会 テーマ
7. あざみ祭 テーマ
8. スポーツデー テーマ
9. 健康セミナー テーマ
10. 市民講座 テーマ
11. 海外研究シリーズ テーマ
12. 横浜フランス月間 テーマ

<執筆者紹介>

<編集後記>

表紙デザイン：クローデット・ベルニエ（筆）

“Ubi Caritas et amor, Deus ibi est.”

ラテン語の意味は

「愛といつくしみのあるところ、神はそこにおられる。」

はじめに

この記念誌は、カリタス女子短期大学創設 50 周年および同短大の閉学にあたり、わたくしたちの歴史をふりかえりながら、果たしてきたその活動・役割・意義などについてまとめたものです。その意味では、「記憶」が中心となっています。

ただし、内容は過去への単なるノスタルジアではありません。建学の経緯から新学科創設時の裏話まで、あるいは勉学・行事・海外との関わり、そして本学の果たしてきた社会的役割まで、その中身には、語り部的な「ストーリー性」もたっぷり含まれています。本記念誌の真のねらいは、こうして過去のことを引き出しつつ、それらとの間に「精神的対話」を試みることにあり、とわたくしたちは考えています。

執筆にあたったのは本学の教職員ですが、外部の客観的立場からカリタス女子短期大学の役割を再考察する視点があってもよいのではないか……。わたくしたちは、そう考えました。そこで、カナダ・ケベック州の教育行政についての傑出した研究者であり、同時に、日本のカトリック教育などについても詳しい清泉女子大学名誉教授・小林順子先生にご執筆を依頼いたしました。ご多忙にもかかわらず、同先生は本学のために大変快くお引き受けいただき、しかも熱意をもって素晴らしい原稿をお書きいただきました（「特別寄稿」をご参照）。実にありがたいことです。ここに編集委員一同、あらためて篤く御礼を申しあげる次第です。

この記念誌の刊行にあたっては、教職員が熱心にとりくみました。視覚的資料として写真も多く掲載しましたが、結構手間がかかったのは、その選定と巻末のデータでした。地道で時間を要するこの作業にとりくんだのは、加藤美保事務長でした。仲間うちとはいえ、ひとこと御礼を申し上げます。さらには、編集の最終段階で、レイアウトやデザインなどに関し、事務室の内田香織さんにも大いに助けられました。感謝しています。

カリタス女子短期大学への深い思いを共有し、かつ、チームワークの良さを基調に、こうしてできあがったのが本記念誌です。皆様の心の糧の一つとなれば幸いです。

カリタス女子短期大学「記念誌」編集委員会



写真で見るカリタス女子短期大学の50年

短期大学歴代学長



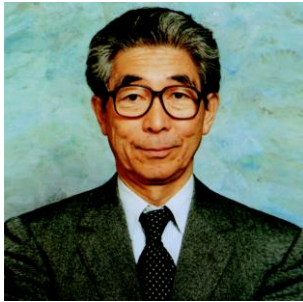
Sr リタ・デシャエンヌ (1912年～1992年)
カリタス学園初代理事長 (1960年～1986年)
カリタス女子高等学校専攻科(短大の前身)校長 (1964年～1966年)
カリタス女子短期大学学長 (1966年～1985年)



Sr 湯原 美陽子
1985年～1993年



Sr クローデット・ベルニエ
1993年～1998年



香山 芳久
1998年～2002年



久山 宗彦
2002年～2012年



Sr クローデット・ベルニエ
2012年～現在に至る



1993年10月
ケベック・カリタス修道女会
来日40周年を記念して
日本を訪問された
総長 ドウニーズ・マルク様
(前列右から4人目)と
当時の教職員

(中野島編)



上 校舎外観

左上 校舎内部

左中 開学式

左下 開学式 感謝の祭儀

右上 1966年 第1回入学式

右中 リタ・デシャエンヌ学長の
フランス語の授業

右下 五唐勝先生の文学の授業



(中野島編)



左上 図書館
左下 プリソン先生のタイピングの授業



右上 学生ホール
右下 テニスクラブ



左 カリタス・フェア
上 カリタス・フェア
右 カリタス山の家

左下 クリスマス会
右下 スキー教室



(あざみ野編)



下 開学当時の校舎
一周りには何もありませんでした



花と緑に囲まれた美しい校舎



左 中庭のマリア様
下 聖堂



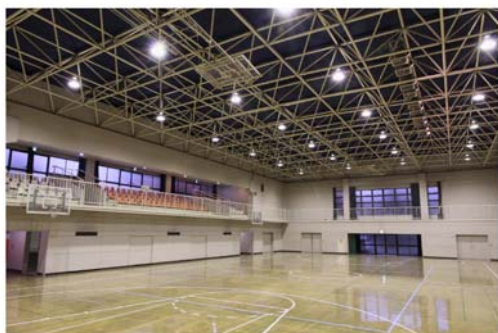
左上 2Fテラス
左下 体育館



中上 図書館
中下 和室



右上 正門から見た校舎
右下 ロビー



(あざみ野編)



上 1981年 あざみ野キャンパス第1回入学式
 下 あざみ野キャンパス初期の授業風景
 左よりナド神父様、ベルニエ英語科長(当時)、アガタ仏語科長(当時)



上 LL教室(左)とタイプ室(右)
 下 PC室(左)とCALL教室(右)
 -いつも時代の先端を行く機器を導入した授業を行いました



右「静かに考える会」
 上 若林野菊の家にて湯原学長(当時)と
 下 伊豆の天城山荘にてナド神父様と



上 大教室 梅村司教様の全学講演会
 下 1984年 仏語科設置 第1期生



聖堂の MARIA 様



カフェテリア 調理師の荒木さん
 -思い出の美味しいランチやケーキ



(あざみ野編)



オリエンテーション親睦旅行



クラブ活動
テニス部



パティスリー・アミューザント パースデーボードクラブ



あざみ祭
英語演劇部

模擬店



スポーツデー



後夜祭



学友会主催 忘年会



クリスマス会

ロビーの馬小屋



聖歌

聖劇(影絵)



平成26年度 カリタス女子短期大学言語文化学科 入学記念 2014年4月3日



上 学位授与式
右 卒業パーティ



左 最後の入学式
(2014年)



平成25年度 カリタス女子短期大学 卒業式

I カナダ・ケベックから日本へ

第1章 カリタス女子短期大学の50年を振り返って

クローデット・ベルニエ

「カリタス女子高等学校の第一期生が卒業するころまでには、“カリタス教育”を継承しながらさらなる高等教育の一環として、また総合学園の教育的仕上げとして、是非、短期大学を開学していただけないか・・・」。こうした強い要望が保護者からありました。当時の文部省から短大設立の認可を得るためには、それに適合した人材を集め、いろいろな行政的手続きなどが必要でした。そこでまず短期大学の前身として、専攻科を開くことから出発しました。52年前の1964年のことです。そしてカリタス女子高校の卒業生のうち25名が、同年4月に第一期生として専攻科に入学しました。



その後、初代カリタス学園理事長 Sr. リタ・デシャエンヌのもとで進められた2年間の多様な準備を経て、待望のカリタス女子短期大学が設立される運びとなりました。そして1966年の4月の入学式では、48名の短大第一期生を迎えることができました。カリタス学園の教育の特徴と社会のニーズに鑑みて、当時は「英語科」単独でのスタートでした。

私は前年の秋の1965年に来日して日本語の勉強をしながら、その第一期生の学生にオーラルイングリッシュを教えました。彼女たちはとても勉強熱心で良い学生達だったことを、今でもよく覚えています。

創立時の短大は、中野島キャンパスのカリタス女子中高の校舎の一部、主に4階を借りてのスタートでした。こじんまりとしたシンプルな環境ではありましたが、教師と学生達との温かい家族的交わりの中で、短大の良き伝統の基盤を作り上げていきました。

実にこの短大は、最初から献身的で優れた教職員に恵まれました。誰もが一致協力し、絶えず活性化を目指し、さらなる発展に向けて学生の勉学と成長に全力を注いでいたからです。ここでは、とくに初期から短大の校風と良き伝統を築いて下さった先生を2名ご紹介したいと思います。

短期大学の基礎づくりに大いに貢献された二人の方

まず、カリタス学園全体とカリタス女子短期大学に大きな影響を及ぼした初代理事長、兼学長 Sr. リタ・デシャエンヌのことを述べたいと思います。

彼女は、1953年に初来日した3人のシスターのうちの一人でした。日本語と日本の文化に馴染みながら、学校建設にむけて着々と準備を進めました。そして、カナダの修道会本部から寛大な援助を受け、協力者と共に立派に学園の基盤を築かれました。



執務室にて Sr. リタ・デシャエンヌ

いつも優しい笑顔を浮かばせながら、教職員や学生の真の幸せと成長を願い、しかし時には厳しく指導することもありました。リタ先生の教育ビジョンは、信仰を土台とし、聖マルグリット・デュービルから受け継いだカリタス「愛」の精神を、子供たち、若者たち、教職員、そして保護者の皆様に伝えたいという熱意に燃えておられました。

こうした熱意をもって重責を担い、様々な試練を乗り越え、経営者として、また教育者としても、優れた能力と才能を発揮されました。Sr. リタ は、深く日本を愛し、高齢のためカナダに帰国した後でも、日本とカリタスは彼女の懐かしい心のふるさとでした。

また、レイモンド・ナド神父様は、この短大に計り知れない精神的遺産を残して下さったもう一人の方です。ナド神父様は、いつも明るく暖かい顔の表情で学生を迎え、ユーモアを愛し、大変な人気者でした。26才でケベック外国宣教会から派遣され、来日なさいました。日本語を勉強してから、カリタス学園指導司祭の任命を受け、短大生との関わりを持ち始めました。ナド神父様はいつもいきいきした授業をなさり、学生に神様の愛と聖書の喜ばしいメッセージを言葉だけではなく、行動をもって伝えていきました。学生部長としても各行事に熱心に加わり、若い心で学生の誰とも喜んで付き合っていました。教職員にも、常にどこでも冗談を交えて励ましと希望を与えていました。



レイモンド・ナド神父様

ナド神父様は、1996年の8月の半ば頃まで、いつもと変わりなくお元気でご活躍されていて、前期の授業を全て終えられ、秋のあざみ祭の準備にも参加しておられました。ところが8月後半に突然体調をくずされ、病院で検査を受けたところ、癌の末期だと診断されました。介護者の付き添いでその直後にケベックに帰郷され、9月20日に60才で帰天されました。

国際的雰囲気の中なかで

ところで、カリタス女子短期大学の開学にともない、設立母体の修道会からは、4人のシスターが派遣されました。その後の30数年の間に、合計16名ほどのシスターたちが、短大の他の教員とともに、学生の成長と真の幸せを願って、精一杯、奉仕してきました。

カリタス学園の小・中・高よりも大勢のシスターたちが短大に派遣されたのですが、それは、特に外国人のシスターたちにとって教えやすい環境だったからです。彼女たちは、英語、フランス語、キリスト教学、タイプライティングといった科目を担当し、その一方で学生達は、カナダ人やアメリカ人のシスターから授業を受けることに新鮮な驚きと興味を感じていたようです。クラブ活動においても、愛情に溢れる関わりと、国際的雰囲気の中で、学生達は楽しく学ぶことができたと思います。

短大の最初の約20年の間、初代学長を務めたSr. リタの優れたリーダーシップを含めて、先生方は、ご自分の能力や、学識、活力、そして労苦をも、学生の育成のために惜しまず注いでいきました。こうして、カリタス女子短期大学の活動範囲は広がっていき、同時に業績も着々と積み重ねながら、その伝統をより豊かなものにしていきました。

こうしたなかで、短大の歴史に二つの大事な出来事が刻まれました。新校舎の建築と仏語科の設置です。

新校舎と新キャンパス

前述のように、カリタス女子短期大学は、中高の校舎の一部を使って出発しましたが、いずれ新校舎を建てるのが開学の前提でした。中野島キャンパスの土地の面積では、文部省の大学設置基準などに合致せず、新校舎をそこに建てることはできなかったため、開設約10年後に新しい土地を探し始めました。川崎市内や横浜市内の空いている土地を訪ねたり、交通のアクセス面なども含めて様々な視点から候補地を検討しました。その結果、立地条件の極めて良いあざみ野に、高等教育の場として相応しい土地を見つけることができました。学校法人全体の理解と援助を受けて、購入に至ったのはいうまでもありません。その後1年以上かけ、教育理念と伝統を活かせるカリタスらしい魅力的な校舎の設計を入念に準備し、やがて建設にかかりました。そして1981年4月、カリタス女子短期大学の機能は中野島からあざみ野に移転しました。それは、ちょうど短大の創立15周年目でした。

仏語科の設置とその後の動き

あざみ野へ移転して2年後、つまり1983年に、英語科に加え、カリタス小・中・高のフランス語教育の一貫として新たに仏語科を設置しました。新学科の定員は25名。既習者と未習者のクラスに分け、徹底した少人数の教育による密度の濃い学習を行なってきました。

このようにあざみ野へ移転して以降の短大は、しばらく安定した良好な歩みを続けていました。というのは、英語科・仏語科へのカリタス女子高校からの入学生や他校からの受験生が、定員をかなり上回るレベルで推移していたからです。

ところが、1990年代に入ると、日本社会の変化にともなう新しいニーズが生じてきました。そのため、18歳人口の減少への対応策とともに、現代の若い人たちにむけた、より魅力ある短大の未来像を生み出す必要性を感じるようになりました。

現代の新しいニーズに応えるための改革 —改組転換—

この課題をとりあげるため、1993年から教授会で話し合いが進められ、1994年度に特別の委員会（EVA-PLA）が設置され、具体的な準備と対応に取りかかりました。そして、委員会が作成した膨大な申請書類を文部省に提出し、1995年に英語科・仏語科2学科を改組転換し、「言語文化学科」として1学科3専攻、つまり、英語・英語圏文化専攻、仏語・仏語圏文化専攻、そしてコミュニケーション文化専攻へと“衣替え”をしました。とくに初代学科長に就任された村井幹子先生には大変なお骨折りをいただきました。

この改革の目的は、語学をコミュニケーション能力を高める道具として捉え、外国語教育とともに異文化に触れながら相互理解を深め、国際的感覚を身につけ、そして海外研修・留学などを通して、グローバルな視野を備えた学生の育成にありました。

また、新学科のもとでの3専攻によって、募集の改善も見込んでいました。実際、数年の間、各専攻の定員にふさわしい志願者が集まり、学科全体の定員の1.3倍にあたる新入生も迎えることができました。改組転換がタイムリーで、その内容も良い結果をもたらしたと言えるのです。一つの学科の下で皆が一致し、希望を抱き、将来を見据えていたのです。

コース制への移行

しかしながら、日本社会の少子化が続き、その影響が広がるなかで、学生数減少の兆しははっきり見えてきました。そこで、言語文化学科という大きな枠組みを堅持しながら、各専攻間の垣根を低くすることが望ましいと感じるようになりました。

短期大学の「将来構想委員会」が一年以上かけて検討した結果、2009年に、3専攻を次の4つのコースに再編しました。

- ①英語・英語圏文化コース、②仏語・仏語圏文化コース、
- ③現代コミュニケーションコース、④社会文化システムコース

生きた言語運用能力を身につけ、自己表現とコミュニケーション能力を養い、ビジネス力を身につける、という各コースの目的を定めました。そして、学生の将来への選択肢を広くするため、カリキュラム内容を見直し、所属コースを問わずに科目を履修できるように配慮しました。

しかし、残念ながら、期待していたほど学生の入学状況が改善せず、年ごとに募集が厳しくなってきました。

さらなる発展を目指しての対策と工夫

前述の改組転換とコース制への移行は、カリタス女子短期大学の歴史の中で大きな改革でしたが、それに加えて、さらなる発展を目指し、種々の対策や工夫を行ってきました。

まず、資格志向の強い社会状況を考慮して、早い時期から様々な資格を取得できるように図りました。例えば、秘書士（国際秘書）、ビジネス実務士、国際ボランティア実務士、情報処理士、社会調査アシスタント、漢字検定、日商簿記2級などの導入です。もちろん、従来からある中学校教諭二種免許状（英語）や秘書士などの資格取得課程は、大切に継続実施されました。

さらには、奨学金制度の拡充を通して、海外留学しやすい環境づくりをおこないました。つまり、奨学金の種類を広げ、短期・長期派遣奨学生制度などの語学留学、体験留学、「国際ボランティア in カナダ」やカンボジア・スタディ・ツアーなどの研修制度を整えました。

また四年制大学への編入学希望者が増えるなか、そのための指導も徹底しました。その結果、お茶の水女子大学や東京女子大学など、名門国立・私立大学への編入実績を数々と作りあげていきました。同時に、就職を望む学生のためには、教員の他にキャリアカウンセラーの資格を持つ専門スタッフを置き、学生の希望通り就職ができるように細かく支援を行ってきました。

他方、あざみ野へ移転してから、豊かな町づくりに貢献する大事な共同体として、カリタス女子短期大学は、地域の人達との知的・文化的連携を強めてきました。プティ・コレクションや各種公開講座の開催、青葉区区民団体への活動場所の提供、ボランティアとして学生の協力、神奈川県・横浜市・青葉区との共催による教育・文化活動への深い関わり等々、社会に役立つ短大であるよう努めてきました。

上記の経緯のなかで、短大は「財団法人短期大学基準協会 第三者評価」から、教育内容・教育目標の達成・研究・社会活動・管理運営などの分野に関して、厳格な審査を受けました。その結果、カリタスは全ての領域で、高等教育機関として「適格」との好評価を2008年度に頂きました。

おわりに

こうしてカリタス女子短期大学の歴史を振り返ってみますと、創立時に築かれた良い伝統と建学の精神が生かされ、継承され、同時に、歴代の学長を始め各年代の教職員がそれぞれの時代のニーズを踏まえ、カリタスの教育使命の実現を目指し、余すところなく学生の知的、精神的成長に尽くされてきた、とあらためて思うのです。

これほどの素晴らしい業績を誇れるカリタス女子短期大学は、いつまでも存続できうると考えていたのですが、この世の組織には人間と同様に寿命があると、少しずつ思い知らされるようになりました。いかなる種々の対策や努力を重ねても、日本社会の少子化の波、高学歴化志向の強まりなど、かつてない急激な社会変動と歴史の流れには逆らえず、年々、学生募集が深刻化してきました。将来の定員確保、および短大運営に関わる財政健全化が見込めない状況に直面した学園理事会は、慎重にも慎重な議論を何度も重ねた末、ついに平成27年度(2015年度)募集停止という苦渋の決断に至りました。

募集停止を公表してから教職員は寂しい気持ちを懐きながらも、学生達の指導に誠意をもって尽くしていることに何ら変わりありません。そしてカリタスのミッションの成就にむかって、最後まで建学の精神、つまり、「愛の精神」を輝かせ、短大の素晴らしい歴史に相応しいエンディングを迎えようとしています。

カリタス女子短期大学が幕引きをした後でも、また、たとえ懐かしい校舎の姿は消えたとしても、学生の育成に献身された教職員と卒業生を結ぶ心の絆は、時間と空間を越えて、決して無くならないものだと確信しています。

カリタス女子短期大学の50年を振り返る記念誌が皆さんの協力で作り上げられたのは、このうえない喜びです。本記念誌の各ページに「カリタスー愛」が染み通っていて、まさに「神はそこに共にいる」と語りかけている心の温まる宝物です。

聖書の中で50周年は、JUBILÉと呼ばれる神に捧げられる年で、特別な恵みと感謝の年とされています。カリタス女子短期大学のJUBILÉにあたり、数えきれない恵みに深く感謝し、50年の歴史を築いてこられた皆さまの上に神の豊かな祝福を心から祈っております。



竹中 豊

はじめに ケベックについて

「ケベック」(Québec)とは、先住民の言葉で「川幅の狭くなる場所」という意味です。セントローレンス川に面したケベック市は、ここから川幅が狭くなります。古くはヨーロッパと北米を結ぶ港町として、また北米におけるフランス文明の拠点として、大きな役割を果たしてきました。カリタスのルーツは、こんなところを背景としています。



カナダ・ケベック州

おのずと、ケベックはカナダのなかでも飛びきりユニークな州、と言っても過言ではありません。北米（メキシコを除く）は圧倒的に英語文化圏が優位な地域ですが、そんな中であってケベックは英語系に吸収されることなく、独自のフランス語文化圏を守り抜いてきたからです。たとえば英語圏の州からケベック州に入ると、町並みや雰囲気も一変するのに気づきます。道

路標識は国道を除きフランス語のみ。しゃれたレストランやカフェの数も断然多くなります。そう、ケベックは文化・言語・食文化・メンタリティに至るまで、英語圏の他の地域と歴史や経験を共有していないのです。ケベックがカナダのなかで「特別な社会」(société distincte) とされる理由です。

歴史的背景

ケベック・カリタス修道女会を生んだこうしたケベックを語るには、その歴史を抜きには始まりません。その過去を少し覗いてみましょう。

15世紀～17世紀にかけて西ヨーロッパ諸国は、新大陸に進出し始めました。いわゆる「大航海時代」の到来です。その一環として、フランスの探検家ジャック・カルチエ(1491-1557)が、1534年、ケベック州の北東にあるガスペ半島に上陸しました。今日からすれば、随分と奇妙なことですが、そこを自らフランス領と宣言したのです。これが北米におけるフランス領の始まりでした。

しかしこの大陸でフランスの本格的植民活動を見るのには、17世紀の夜明けを待たねばなりません。やがて1608年、フランスの探検家サミュエル・ド・シャンプラン(1570頃～1635)が、要塞都市として現在のケベックを築きます。これが、北米におけるフランス文明のルーツとなります。「ヌーヴェル・フランス」と呼ばれた北米のフランス領は、やがてこ

の都市およびモンリオールを拠点に拡大していきます。その領域は、18世紀前半までに五大湖をはさんでミシシッピー川を南下し、現在のアメリカ南部のルイジアナ州まで、実に広大な地域にまで及びました。



1750年頃の北米におけるフランス領(ヌーヴェル・フランス)

北米大陸の大西洋側にはイギリスも植民活動をしていましたから、ヌーヴェル・フランスが大陸内陸部に広がるにつれ、西漸するイギリスとフランスと利害が衝突するのは自明のことでした。これが北米における英・仏植民地戦争で、17世紀後半から18世紀半ばまで間欠的ながら約100年続きます。結局、海軍力・人口数において劣勢なフラ

ンスはこの戦いに敗れ、北米におけるフランス領は実質的に失われました。

以後のカナダはイギリス領となるのですが、アメリカの独立戦争の機運が高まると、イギリス政府は、カナダにいるフランス系の人たちにたいする宥和策をうちだします。これが1774年の「ケベック法」です。それにより、ケベックではカトリック信仰の自由、フランス系文化の温存が約束されました。以後のケベックの人たちは、精神的基盤をカトリシズムに、経済的基盤を農耕に、そして文化的基盤をフランス的伝統に置きながら、また大家族制をよりどころとして、内向的世界のなかに生きていくこととなります。その結果、長らく経済発展や進歩から取り残されていたとの見方があるものの、しかし平和で温厚な独自のケベック文化が培われてきたのも事実です。

ケベックがより外向的・近代的方向にむけ、おおきく舵を切りかえるのは、1960年にはじまる「静かな革命」からです。これは、暴力によらない平和的な意識革命、未来志向型の巨大な社会変動のことです。目指すは社会正義の実現、英語系とのより対等な地位の獲得、そしてケベックのさらなる経済的・社会的発展を求めた動きでもありました。歴史的にみて、これは成功したと言ってよいでしょう。ケベックの時計の針が、19世紀型から20世紀型へと大きく進み始めたのです。

こうしたなかで人々の価値意識は、伝統主義から進歩主義へ、大家族制から核家族制へ、宗教的神秘主義から脱宗教化へ、などと大きく変化していきます。政治的には、ケベックの分離・独立、主権・連合を唱えるグループも、多数派ではないにしても登場しました。

こうみても、ケベックは植民地戦争でイギリスに敗れ、イギリスの支配下に置かれた過去を経ながら、しかし「生き残り」をかけて、文化的アイデンティティを堅持してきたユニークな姿が浮かんできます。

ケベックの精神的基盤の生成

ケベックのルーツは、前述のように 17 世紀～18 世紀半ば過ぎまでのヌーヴェル・フランス時代に形成されましたが、その精神的・伝統的基盤はカトリック教会にありました。もちろん、無風状態から突然ケベックのカトリシズムが誕生したわけではなく、そのさらなるルーツは遠く 17 世紀フランスのいわゆる「霊性」に求められます。それは、宗教的神秘主義の刷新、対抗宗教改革、神学の発展、数々の修道会の創設、および海外宣教への情熱などに見られます。フランスの植民地として登場したケベックは、直接・間接にこれらの延長線上にありました。

ここではケベックの文脈に限って眺めてみましょう。1608 年にシャンプランがケベックを創設してからわずか数年のうちに、フランシスコ会一派レコレ会やイエズス会などの宣教師、あるいはウルスラ会の修道女たちが、使命に燃えてヌーヴェル・フランスに到来します。その活動は、教会・修道院・神学校・病院の設立、使徒的使命の実践、布教や教育などさまざまでした。ヌーヴェル・フランスおよびその後のケベック社会は、生活の隅々にまで、カトリックの活動が浸透していったのです。

やがて 18 世紀になると、ケベックは、対内的には社会的・政治的統治体制が整いつつも、しかし対外的にはイギリスとの植民地戦争が本格化し、やがては 1763 年のパリ条約によりイギリスの統治下に置かれる、という大きな激動の時代を迎えます。

本学のルーツであるマルグリット・デュービル (1701-1771) が登場するのは、こうした時代でした。彼女はモンリオール郊外のヴァレンヌで生まれました。20 歳で結婚しますが、夫の横暴や幼い子供の死去など幸福な家庭生活は長く続かず、29 歳で未亡人になってしまいます。しかし人生の苦しみのなかにあっても、彼女は強い信仰のなかに安らぎを見いだしていたのです。そしてカトリック信仰の実践を、貧しい人々のなかでの奉仕活動に求めました。

やがて 1737 年、彼女を含めた 4 名は、「灰色の姉妹会」(修道会) の創設を決意しました (フランス国王からの公認は 1753 年)。その後、公私ともにさまざまな困難に

遭遇しながらも、摂理と永遠の父への信心を糧に、その生涯は更正福祉ホームでの奉仕活動、孤児のための慈善事業、貧しい人々への献身などに注がれました。その一生は、愛、自己犠牲、優雅、謙遜、従順、微笑みに包まれたものでした。彼女が「普遍的愛の母」と称される由縁です。

さらに 19 世紀に入ると、今度はデュービルの強い影響をうけたマルセル・マレ (1805-1871) が登場します。モンリオール生まれの彼女は、デュービルの創設した修道会に 16 歳で志願者として入会します。その 5 年後に誓願をたて、以後も「デュービルの娘」としての強い繋がりを持って生涯を送ることになります。当初から、彼女は家族のいない子供、家庭のない貧者、そして病人の世話などに専心していました。



マルグリット・デュービル(1701-1771)



マルセル・マレ(1805-1871)

彼女の祈りと愛の奉仕活動は、たとえば「ケベック・カトリック婦人慈善協会」の創設(1831年)、モントリオールを離れてケベック・カリタス修道女会の基礎の創設(1849年、公認は1866年)、孤児院の設立など、さまざまな分野に見られます。半面、19世紀前半頃のケベックは検疫体制が不十分なこともあり、衛生状態が悪く、コレラやチフスなどの伝染病が慢性化する時代でした。失業、貧困などの社会不安も常習化していました。さらにはケベック市内の大火、修道会の拠点ホームの焼失、共同創立者との離別など、マレはさまざまな苦難に遭遇します。決して順風満帆の穏やかな社会・生活環境ではありませんでした。

驚くのは、こうした逆境にもかかわらず、マレは常に周囲に対して大きな「愛のあふれ」を伝えることのできた人だった、ということです。それは彼女が何にも増して、篤い信仰のなかにあったからに他なりません。優しい徳、明るい性格、他人の苦しみをやわらげ、そして「風のようにさわやかな人」だったと記録にあります。マレは、心の目をしっかりと開きながら、貧者・病人・高齢者・孤児など、いつも貧しい小さな人々とともにありました。

おわりに

こうした「愛」の歴史を背景にもつケベック・カリタス修道女会は、20世紀半ばになると、遙か遠い北東アジアの国、日本へ修道女を派遣することになります。デュビル、そしてマレの慈しみの精神の広がりです。1953年、後にカリタス女子短期大学初代学長になるシスター・リタ・デシャエンヌを含め、使徒的勇気に支えられた修道女3名が日本にむけて陸路ケベックを出発しました。それはカナダ大陸横断鉄道の旅、さらにヴァンクーヴァーから横浜まで太平洋をまたぐ長い船旅の始まりでした。いやいや、それは「神の愛」を確信したカリタス学園の始まりをも意味していました。

そして2017年の春。目に見える「形」としてのカリタス女子短期大学は、時の使命を果たしたかのように扉を閉じます。しかしこれは決して「愛」(Caritas)の敗北を意味しません。平和のために生きたデュビルとマレの「精神の崇高さ」、そして「愛のあふれ」は、永遠に消え去ることなく、私たちや後の世代の心のなかに生き続けるからです。

聖書にこうあります。「平和のために働く者は幸いである」(マタイ伝、5章9節)。



日本でのミッション活動のパネル展示(本部修道院)



II 建学の精神を求めて

第3章 カリタス女子短期大学の役割と使命を考える

北川 宣子



カリタス女子短期大学の「建学の精神」は、開学から現在まで全く変わることなく受け継がれてきました。それは、(1) キリストの示された「愛」に基づく人間観、世界観を追及し、全人類が「兄弟姉妹となる」ようにと呼びかけられたキリストの精神をもって「人類の真の幸福」のために「奉仕する」人間性の育成をめざすこと、(2) 母体であるケベック・カリタス修道女会の精神に生かされ「神の摂理」に対する深い信頼のうちに、すべての人に対して心を開くこと、そして(3)

「平和な世界」の建設に貢献する「成熟した人間性」の開花をめざすこと、というものでした。これは初期から現在まで1、2年次ともに必修である「キリスト教学」(のちに「キリスト教人間学」と名称変更)の授業を通して学生たちを導いていただけではありません。どの教科においても、シスター方や教員たちがその精神を持って教育を行うことで、学生ひとり一人に自然に「愛・奉仕」の精神が宿っていったといえるのでしょう。

カリタス女子短期大学では、ベルニエ先生をはじめとして、湯原先生、ティボ先生、アガタ先生、ベアトリス先生、ブリソン先生、スザンヌ先生、マルセル先生という8名ものケベック・カリタス修道女会のシスター方、そしてカリタス学園チャプレンでケベック外国宣教会のナド神父様も一緒にさまざまな授業に携わってくださっていた時代がありました。このような恵まれた環境におかれていた学生たちは、シスター方や神父様の精神と姿勢に触れることによって、自ずと本学の「建学の精神」を感じ取ることができたのだと

思います。学生たちだけでなく、他の教員たちもシスター方に日々触れることで、「愛」の精神が自然に受け継がれていきました。その後、複数のカナダ人シスターが帰国されてからも、シスター 井手先生や援助修道会のシスター 久守先生そしてオタワ愛徳修道女会のシスター ラミ先生などにより、その伝統はしっかりと守られてきました。現在、短大にはベルニエ先生とブリソン先生のお二人のシスターがいらっしゃいますが、われわれシスター以外の教員に受け継がれたこの精神を、学生たちは確実に感じとってくれていると実感できます。



カナダ・ケベック市にて (左から Sr.ティボ先生、
保田先生、筆者、元幼稚園長 Sr.米村)

建学の精神を実践して

ところでこの「建学の精神」をあらためて実践面で振り返ってみると、教員たちと学生たちの深い関わり方にあるといえましょう。入学後 間もない時期のオリエンテーション親睦旅行では、夕食後に教員とコミュニケーションを取る時間を設け、新しい学生生活に不安を抱いている新入生たちとの交流で、その不安を和らげる場を提供してきました。また、学生生活が始まると、「相談役」や「アドバイザー」、そして後には「学生支援」という名称で、時代とともにその呼び方は異なりましたが、教員はいつでも親身になって学生と向き合い、結果、教員の研究室には常に学生たちの姿が見受けられました。学生が本学を選んだ理由の一つはこうしたアットホームな雰囲気があるからだ、とよく耳にしました。教員と学生の距離が近い、そんな印象が入学の大きな動機になっていたようです。

この「奉仕の精神」と「成熟した人間性」を養うのに貢献したのは、先に述べた「キリスト教人間学」の授業だけではありません。カリタスでは、教養を身につけることは勿論ですが、早い時期から、卒業後、社会に貢献できる人間の育成に力を入れてきました。実は私自身も卒業生であり、カリタス女子短期大学との関わりは 30 年を越えるのですが、本学は建学当初から、英語を駆使して社会に貢献できる人間の育成をめざしていました。それは、私が在学していた 1969 年頃から、「口語英語」(のちの「オーラルイングリッシュ」)ではネイティブ・スピーカーの先生たちと楽しく語る場があり、*Japan Times* の社説をも読みこむ「商業英語」やスピードを競う「英文タイプ」など、日本の短期大学ではまだ学べなかったような魅力的な語学の授業が豊富だったことで証明できるでしょう。

私事になりますが、私は父の仕事の関係で長らく英語圏の国で生活しており、帰国後に本学に入学したのですが、これまで学んでいたことをそのまま継続して、そしてさらに深く学ぶことができたので、英語を忘れてしまいそうな不安は全く抱かずにすみました。そのお蔭もあり、卒業後は外資系の企業に就職することができ、しばらくは実務の世界での仕事に就いておりました。

1975 年から 1984 年までは上に述べた科目の他に、バイリンガル秘書を意識した“Business Communication & Correspondence”、“Secretarial Procedures”や「英文速記」のような実務科目、さらに「時事英語」なども加わった、本学独自の秘書課程のカリキュラムが設置されることになります。この頃からしばらくは、短期大学全盛期時代ともいわれ、本学の卒業生は、カリタスで育まれたその人間性とすぐれた語学力で企業では高く評価されました。そして 1985 年以降には、当時の全国短期大学秘書教育協会(現在の全国大学実務教育協会)の「秘書士」認定証が取得できる「秘書課程」のカリキュラムが導入されました。現在でこそ「秘書士」や「秘書検定」などの資格は一般的ですが、本学は、初期の頃からこのような時代の最先端のカリキュラムを保持していたといっても過言ではないでしょう。

昨今は資格志向といわれており、多くの短期大学は競ってさまざまな資格を採り入れ、ともすれば専門学校化したように思われがちです。しかし、本学は資格とはいえ、豊富な教養科目の揃ったカリキュラムの特色を活かしています。具体的には「国際ボランティア実務士」、「社会調査アシスタント」、そして「秘書士」に加え、国際性を活かした「秘書士(国際秘書)」や社会に出た際の即戦力を意識した「ビジネス実務士」、「情報処理士」など多彩な資格が取得可能となっていきました。少人数教育という恵まれた状況のなかで、学

生にとっては願ってもないさまざまな資格にチャレンジできるという理想的な環境だったと思います。本学が就職に強いと評判だったのは、多くの資格が取得できただけでなく、就職希望者のためには「ビジネス基礎講座」という科目を設置し、単位化するなど、就職支援の充実を図っていたこともその理由の一つです。

このように振り返ってみますと「英語科」単科で始まったカリタス女子短期大学が、やがて2学科に発展し、さらに「言語文化学科」という大きな可能性を持つ学科へと改組転換し、変化していく様は、まるで変幻自在にその形を変える万華鏡(Kaleidoscope)のようにも感じられます。



「ビジネス基礎講座」の講師の榎原先生(中央)と担当教員 (後列左から北脇先生、浅井先生 前列左 筆者、右 樋口先生)

創立 50 周年を迎えた今思うこと

伝統ある語学教育と「カリタス(愛)の精神」を掲げ、実践してきたカリタス女子短期大学が、50年目の記念すべき節目にその幕を引こうとしている今、日本および世界で活躍している多くの卒業生の成長した顔を思い浮かべた時、本学はその使命を十分に果たしてきたのではないかと実感します。同時にこの「建学の精神」も、卒業生ひとり一人の心の奥底に深く宿っていると強く感じるすることができます。カリタス女子短期大学が、中野島キャンパスから始まり、緑に囲まれたレンガ造りのここあざみ野キャンパスで幕を閉じることになることは、短期大学に30年以上も関わってきた私にとって、とても感慨深いものがあります。本学が、卒業生は勿論のこと、地域の方々からも愛され、惜しまれていることは、募集停止後に行われた、最後の「市民講座」に参加された市民の方々との触れ合いのなかで、また「高大連携総合講座」の企画に携わられた総合高校の先生方との対話のなかで、そして近隣の店舗の方々との交わりのなかなど、さまざまな場面で味わうことになりました。

現在、たくさんの卒業生たちが、この懐かしい学び舎に別れを惜しむように訪れては、思い出話に花を咲かせています。そしてそれぞれの顔には、2年という決して長くはない在学期間であっても、ここカリタスで学ぶことができたという満足感と一体感が感じられます。

国際感覚を身につけると同時に、「愛と奉仕の精神」と「成熟した人間性」という「建学の精神」を



母校を訪れた卒業生2名と (左端 平先生、右端 保田先生)



母校を訪れた卒業生たち

ここカリタス女子短期大学で心身共に育んできた多くの卒業生たち、その卒業生の一人として、そして教員の一人として、私は厳かな気持ちで、来年2017年3月に巣立っていく最後の卒業生を送り出したいと改めて思うのです。

第4章 マルグリット・デュービル列聖記念をめぐって ／仏語科設置とその精神

稲葉 延子

あざみ野のカリタス女子短期大学事務室玄関を歩いてすぐのロビーには、聖マルグリット・デュービルの肖像画が架けられています。この学び舎で時を過ごした人はみな、カリタスを思うとき、この絵画はよき思い出のひとつではないでしょうか。これは現学長のクローデット・ベルニエ先生ご自身が描かれたものです。

さて、聖マルグリット・デュービル（1701－1771）は、



カリタス学園の創立母体のケベック・カリタス修道女会、並びにオタワ愛徳修道女会の共通の創立者です。

今から四半世紀前の1990年12月9日、マルグリット・デュービルはローマ教皇ヨハネ・パウロ2世によって列聖され、カナダ生まれの初聖人となりました。ローマの聖ペトロ大聖堂での列聖式には、学園指導司祭のレイモンド・ナド神父様、スール・クローデット・ベルニエ理事長（当時）、スール湯原美陽子学長（当時）を始めとして、日本からは関係者約70名

が参列いたしました。この時の様子は、カリタス女子短期大学の『研究紀要 CARITAS』（第26号、1991年）に詳細な記録が掲載されております。⁽¹⁾日本においても、同年12月23日に東京カテドラル聖マリア大聖堂において記念ミサが行なわれ、カリタス学園の教職員、同窓生等、約1,000名の関係者が列席しました。この列聖から時間を少々戻します。マルグリット・デュービルが、時のローマ教皇ヨハネ23世に福者に列せられたのは1959年5月3日で、カリタス学園（中学高等学校）創立の2年前のことです。学園が創立されてすぐに、福者マルグリット・デュービルを祝う盛大な式典が中野島キャンパスの学園内で挙行されました。カナダからはるばる本部修道会の総長様もお迎えしたと記憶しております。歓迎の歌はフランス語でした。短期大学はまだ設立されておりましたが、前身の専攻科設置の準備も進行中という状況でした。学園の記念行事が実施され、同年1961年、マルグリット・デュービルの胸像が旧校舎中央玄関に設置されました。この像は、今では中学高等学校新校舎の玄関ホールで見ることができます。



カナダ生まれ初の聖女となったマルグリット・デュービルですが、1991年6月には、ケベックで大々的なお祝いのミサやその他のイベントが開催されました。そのケベックでの

ミサとイベントに学園から参加する派遣団が組織されましたが、その旅に、筆者も学園（短期大学）の教員であり同窓生（中学校二期、高等学校五期卒業生）という立場で、加わることとなりました。

「カリタス女子短期大学の50年を振り返って」の名の下に寄稿するにあたり、同窓生の皆さまに伝え残しておきたいこと、その一つは、始まりから終わりまで関わった当事者としての「仏語科設立をめぐる経緯の実録」を述べることでありますが、その前に、この1週間の「マルグリット・デュビルの旅」を綴ることも大いに意味あることだと思っています。シスター方を除けば、ケベックで列聖を祝う旅に参加し、かつこの冊子に執筆しているのは筆者しかいないからです。さらに付け加えれば、シスター方はご自分たちのなされてきたことを余りに「当然のこと」とされるあまり、ことさら言葉にすることがない、と言っていいでしょう。そこに、外部の眼をもつ俗人、つまり筆者のような立場での証言が必要になる所以があります。

この旅は、モンREALとケベック市に正味4日間滞在し、その間に列聖を祝い、マルグリット・デュビルの70年間の足跡を訪ね、ケベック・カリタス修道女会本部、メゾンメール・マレ、レヴィの修道院、さらには、スール・グリーズ（灰色の姉妹会）の本部修道院をも表敬訪問するというように、内容が濃密なものでした。列聖記念ミサは、ケベック市から約20キロ北方のセントローレンス川沿いにあるサントヌ・ドゥ・ポープレ大聖堂で行われました。この時、カリタス学園にて奉職の後、ケベックに帰国したシスター方（筆者にとっては恩師であり同僚でもありました）と再会をはたすことになったのですが、皆さま様に、このハレの日に顔を輝かしていらしたのをよく覚えています。

一方、ケベック市内の中心部にあるメゾンメール・マレを訪問した際には、美味しい食事をいただき、修道院内を案内していただきました。そこでは、ケベック・カリタス修道女会が、伝統的に実施している食事の提供を見学することとなりました。いわゆる「炊き出し」ではありません。

30人くらいの失業者や生活困窮者が並び、食事サービスを受けておりました。給仕しているのは、修道女のほか、子どもたちも加わったボランティアの人たち。パスタやメインの料理、デザートも用意されており、しかも各人がどれでも自由に選べるようになっていました。おかわりをする人もおりました。

私たち一行が、その光景に釘付けになっていると、待機している次のグループの人たちが私たちが珍しそうに観察しているではありませんか。私はサービスを受けている人々を、無遠慮に見てはいけないと自制していましたが、見られているのは、むしろ私たちだったのです。そのうち、シスターに促されて、私は、ボランティアの子どもに「どのくらいの頻度で来ているの？」とか、若者には「ここのシステムはどのようになっているのですか？」などと質問していたのですが、食事サービスを受けている人にとっては、「フランス語を話す、このアジア人はいったい、誰なのだろう？どこから来たのだろう？」という素朴な疑問を、文字通り「遠慮なく」直接投げかけられることになりました。

モンREALの本部修道院
聖女がフランスに注文した永遠の御父の絵



クローデット・ベルニエ
ケベック・カリタス修道女会 日本地区長(当時)
湯原美陽子学長(当時)

この貧者に食事を提供するという伝統は、そもそもマルグリット・デュービルが始めたことで、メール・マレによって引き継がれて、街のパン屋、ケーキ屋、肉屋、すべて提携していて無料で運んでくるシステムができあがっているということでした。もちろん、多少形の崩れたケーキもありましたが、このシステムが確固として成立すること、そしてこのように長く引き継がれてきた事実に、私は充分衝撃を受けておりました。

今から四半世紀前の日本には、いわゆる「炊き出し」があつたとしても、このようなシステムは望むべくもなく、さらに「選ぶ」という人間の尊厳に関わることを「贅沢」と見做して尊重することもなく、お仕着せのものを、「ありがたくいただきますい」という風潮だった、というべきでしょう（2016年の今日もたいして変わっていないかもしれません）。そんな日本から出かけた私にとっては、貧しい人たちに対するこの修道会の伝統的な「食事サービスシステムの実際」を目撃できたことは、この旅の中で一番感動したことであり、帰国後、同僚の短大教職員や学生たちに繰り返し語ったエピソードとなりました。スール・ジャクリーヌ・ブリソンや竹中豊教授たちの尽力で、本学学生を対象とした「国際ボランティア in カナダ」が始まるのは、この後のことです。⁽²⁾

また、シャツやコートを始め洋服が、きちんと洗濯、アイロンがかけられ整然と並べられている部屋も見学しました。もちろん、これも、貧者たちへ配るもので、集められた服がボタンなどの繕いをした後、ジャンルやサイズ別に並んでいる様は、バブル当時の日本から行った者としては、首をたれるばかりでした。この実態をぜひ学生に見せたいと思いました。カナダの貧者のみならず、南米にも送るよう準備しているとのことでした。これらの仕事は、当時すでに平均年齢60歳を超えるといわれる会の修道女だけではできず、聖職者ではない一般の人々のアルバイトやボランティアに支えられていると聞きました。「豊かさとは何か」「貧しさとは何か」、のちに、カリタス女子短大の「静かに考える会」で実践されていくグローバル体験は、⁽³⁾ここに繋がるものです。

仏語科（仏語・仏語圏文化専攻／仏語・仏語圏文化コースの前身）設置とその精神

1981年に中野島からあざみ野へと、キャンパスの移転を果たしたカリタス女子短期大学（英語科）は、83年には、仏語科を設置いたしました。英語科・仏語科二学科の短期大学として、英仏二言語を習得できる場が開かれました。これは、中学高等学校の二言語による外国語教育の継続でもありました。その意味でも、仏語科には、文学や文化科目は共通クラス、語学科目は、初習と既習クラスが置かれました。二言語主義を標榜する国家カナダを身近に感じながら、学生たちは、仏・英の二言語習得をめざしたのです。カリタス女子短期大学『研究紀要 CARITAS』（第18号、1983年）は、「仏語科開設記念論集」と題し、「フランス文学史」を担当された岩瀬孝教授が、次のようにお祝いの言葉を寄せられています。⁽⁴⁾

<…本学の学生は、どれほど恵まれた条件で教育を受けているかがおわかりでしょう。多数のネイティブ・スピーカー教員と、少人数クラスは、マンモス大学ではかなえられない贅沢な望みなのです。しかも本学園には、奉仕犠牲を本旨とする「愛」という理念があり、教員はこれに賛同する者です。…本学の学生諸君は、これらの好条件を活用し、充実した二年を楽しくお過ごしくださるよう祈ります。>

岩瀬教授は13年間、その後は支倉崇晴教授が、同じく「フランス文学史」を、そして、1997年からは15年間に渡り、大賀正喜教授が、「仏作文」や「時事フランス語」をご担当くださいました。学生たちは、小さな学び舎であっても、日本のフランス語フランス文学研究の世界で、高名であるだけでは



岩瀬先生 カリタスのテラスにて

なく、ご自分の学識を惜しみなく与えてくださることでもよく知られていた大家たる先生方から直接、大学院のゼミのような密な指導を受けることで、力をつけてまいりました。このような贅沢な講義を学生たちが受けてきたのも、仏語科設置以来の伝統です。

同時に、フランス語やフランス文学の学界においても、カリタス女子短期大学仏語科は、一定の評価を受けるようになりました。他方、実績ある就職指導の高さは英語科時代からの伝統でしたが、あらたに、仏語科の卒業生の進路として4年制大学の編入学をめざすことは、第一期生からの実効性のある目標となったのです。⁽⁷⁾その後毎年、高校側からは驚異の実績と言われるほどの、編入学実績を積み重ねていきました。ある年には、お茶の水女子大学と同大学院に4名が編入学後の学びを展開していました。



大賀先生 授業風景

仏語科開設時の、リタ・デシャエンヌ学長のお祝いの言葉に、「フランス語圏に足を踏み入れようと思う人は、まずフランス語の勉強をしなければなりません。」とあります。続けて、「カリタス女子短期大学は、…文部省の認可を得て、今年度から仏語科を設置する運びとなりました。」とありますが、この一言、今、目にする多くの方にはなんでもない表現、と思われるでしょうが、開設の準備に携わった者としては、実に万感の思いがあります。

ベビーブームのあおりでむしろ設置が奨励されていた時代と異なり、当時は、学科新設の認可が非常に厳しい時期でした。認可がなかなか下りない多くの四年制大学や短期大学がある中、“奇跡的にも”認可をいただけることになったいきさつは、語りつくせないものがあります。リタ先生、アガタ先生（スール・アガタ・ベルニエ）、そして駆け出しの教員であった筆者は、何度も文部省（当時）に足を運びました。時には突然呼び出されることもあり、書類を返され、今年度は諦めるようにと促されたりしましたが、これに対峙するリタ・デシャエンヌ学長（兼理事長）は、強靱な精神力と使命感をおもちでした。



1953年に来日した3人のシスター
Sr.リタ・デシャエンヌ(右)

ベビーブームのあおりでむしろ設置が奨励されていた時代と異なり、当時は、学科新設の認可が非常に厳しい時期でした。認可がなかなか下りない多くの四年制大学や短期大学がある中、“奇跡的にも”認可をいただけることになったいきさつは、語りつくせないものがあります。リタ先生、アガタ先生（スール・アガタ・ベルニエ）、そして駆け出しの教員であった筆者は、何度も文部省（当時）に足を運びました。時には突然呼び出されることもあり、書類を返され、今年度は諦めるようにと促されたりしましたが、これに対峙するリタ・デシャエンヌ学長（兼理事長）は、強靱な精神力と使命感をおもちでした。

なんといっても、学園設立のために、戦後の日本にカナダから船でやってきた最初の三人の修道女のお一人ですし、また、中学高等学校、幼稚園、小学校、短期大学と、次々に設立し、その所属長と学園の理事長を務めてきた自負があたりだったと思います。

門前払いのような扱いを受けても、片言の日本語で食い下がりました。それでも文部省への行き返りの車内では、心配する私を慰めながらも、日本の役所との遣り取りの難しさを嘆かれることもありました。「カリタスは Mon école (私の学園) なのに」と嘆くリタ様に、気落ちしていたはずの筆者が、若気の至りで「いえいえ、Notre école (私たちの学園) です。」と訂正してしまい、絶句された後大笑いされた思い出もあります。この時期には早々簡単に認可は下りないと言われていましたが、カリタス女子高等学校で新たなカリキュラムでフランス語を第一外国語として学んだ生徒たちが、短大仏語科の設置を当然のように待っているという現実もありました。

さまざまな審査を経て、一年目をかろうじて通り、二年目の審査へと進みました。当時の文部省の薄暗い廊下を、どうみても外国人さらには高齢な女性、つまりはカナダ人修道女 2 人 (スール・リタとスール・アガタ) に手を繋がれて、「その秘書の人、通訳の人」と役人には呼ばれ、大学教員としては年端のいかない稲葉を含めたこの”トリオ”は、おそらくは、多くの役人や他大学の設置委員会の方々には、相当に特異な存在と映ったことでしょう。ある時は、夕刻、文部省に呼び出されて、ようよう夜遅くに学園に戻ってくると、ナド神父様がひとり、待っていてくださったことを思い出します。そして 1983 年、「みなさま、カリタス、だ・い・す・き。だいじょうぶ。仏語科、できますう。」と言うスール・リタの言葉通り、日本でフランス語教育を実施するという一念は、とうとう叶うこととなりました。

その後 1995 年に仏語科は文化面も強調して、仏語・仏語圏文化専攻という名称に、また 2009 年には、より学際的な学びを可能とする仏語・仏語圏文化コースへと発展していきました。この 34 年間で、882 名の学生たちが、リタさまの「フランス語圏に足を踏み入れようと思う人は、まずフランス語の勉強をしなければなりません。」という言葉や、岩瀬教授の「本学の学生諸君は、これらの好条件を活用し、充実した二年を楽しくお過ごしください。という励ましを受けて、それぞれの場で、自己実現を果たしていきました。日本国内はもとよりフランス、カナダ、ベルギー、スイスと、自分の場を求め、フランス語を学ぶことで得た「柔軟性」と「複眼的視野」をもって自律した人間として日々を過ごしていると、私は確信するのです。

(注)

1. 1991 年刊。「今日のマルグリット・デュービル」(クローデット・ベルニエ)、「聖マルグリット・デュービルの生涯」(湯原美陽子)、「マリ・マルグリット・デュービルの列聖式」(湯原美陽子)、「聖マルグリット・デュービルー 今 列聖とは一」(稲葉延子)、「修道会創立者の精神とカトリック学校のアイデンティティーーカリタス学園の心を探る一」(湯原美陽子)。
2. 1999 年開始。後に「国際ボランティア in カナダ」に発展。参照 p. 47。
3. キリスト教人間学の授業の一環として実施されていた「静かに考える会」。参照 p. 21。
4. 岩瀬孝 (いわせ こう) (1920-2002) 早稲田大学名誉教授、演劇評論家。
5. 支倉崇晴 (はせくら たかはる) (1937-) 東京大学名誉教授。
6. 大賀正喜 (おおが まさき) (1932-2012) 立教大学元教授、外務省研修所元講師。
7. 第一期生編入学合格先：上智大学、立教大学、明治学院大学。

第5章 爽やかに「野菊」の如く50年 ～キリスト教人間学と聖マルグリット・デュービルの精神～

浦野 洋司

はじめに

カナダのケベック・カリタス修道女会から3人のシスターが1953年来日、翌年に世田谷区の若林に基礎を固め日本での活動を開始、その50周年記念式典が2003年11月に挙行されました。13年後の今年には1966年短期大学の英語科スタートからちょうど50周年記念の節目の年に当たります。1996年の同修道女会編の小冊子『アソシエ』には「会の精神」として「あわれみに満ちた奉仕の精神…すべての人々に対する深い思いやりの精神」とあります。これは本学キリスト教人間学クラスが目標としているキリスト教的な世界観・人間観に立脚した福祉、奉仕、母的な思いやりの精神と当然ながら全く同じものです。本学が創立当初から行っているキリスト教人間学クラス活動の諸側面を聖マルグリット・デュービルの精神との関わりという切り口で振り返ってみたいと思います。



キリスト教人間学クラス

現在は「キリスト教人間学」ですが、以前は「キリスト教学」（通称「キリ教」）の名称で呼んでおりました。聖書を中心にゼミナール方式で学生一人ひとりの知的育成を目指すと同時に、他者の必要への思いやり（つまりカリタス）の実践的な行動を展開できる人格の育成を目指してきました。繰り返すようですが、キリ教が目指してきた目標の中心は、母体であります修道女会創立者のカリスマの基本、特に弱い立場の人々に心を寄せ、人類共同体に目覚めさせることです。また、世界の現状を見、自分で考え、人間の尊厳を悟り、よりよい世界を築くために何か必要で自分に何ができるかを考えていくことを促すなど、このためにグループ討議や発表、レポート作成などを行ってきました。

全学講演会（故濱尾文郎枢機卿と梅村昌弘司教他）



カトリック横浜教区に所属するカトリック校として、2年に1度、横浜教区長を招き、全学での講演会を授業の一環として実施しました。司教講演の基本も同じように、より大きな視野で現代社会に邁進する若い精神を鼓舞しつつキリスト教の根本であります愛、奉仕や福祉、弱者の側に立つ精神を伝達することでありました。司教以外の隔年には各界の要人を招いて同様の講演会を実施、地元の元横浜市長、中田宏氏や現横浜市長である林文子氏にも講演をお願いいたしました。

創立記念クラス

毎年 10 月 16 日の開学記念日前後に、短大キャンパスを離れ、ケベック・カリタス修道女会本部修道院で 1 学年全員のための特別クラスを行いました。これは創立者聖マルグリット・デュービルやマルセル・マレの生涯と本学のルーツとしての会の歴史や建学の精神の源について更に深く触れる良き契機となりました。

点灯式・準備クラス・クリスマス会



中野島キャンパスで「点灯式」を始めた頃、短大では特に近隣の小さいお子さんたちを招致し紙芝居やお話の会と合わせて小規模ながら温かい雰囲気「点灯式」を実施してまいりました。その後の 12 月には 4 回のクリスマス準備クラスを行いました。青森の藤聖母園（児童養護施設）の子供たちのために手作りクリスマスカードを制作し、そこに心のこもった小さな手紙を同封し発送しました。大変手間のかかるものでありますが、一人から一人へと親密なコミュニケーションを深めるという特徴があり、学生も子供もその両者が深い結びつきを体験しました。後述の「静かに考える会」の 2 年版として代表者が翌年に実際に青森まで出向いて子供たちと対面する企画も行いました。残念ながら、個人情報保護法の成立や、受け入れ施設担当者の高齢化、その他の理由で徐々に実施が困難になり、十数年前に青森への 2 年生企画は取りやめとなりました。

「クリスマス会」は学生にとって、キャンドル・サービスなどは大変印象深いものがありました。招待客は、

近隣の独り暮らしの高齢者、短大でパンを販売に来る障害者の皆さんやその他の作業所に所属の人々など短大関係者です。学生が作成したクリスマスカードを発送する前に全員で沈黙、按手して神からの祝福を祈るのも厳粛で重要な項目でした。キャンドル・サービスをはじめ、全員での大合唱や音楽演奏、その後の会食も楽しい恒例行事として長く記憶に残ると思います。

静かに考える会

静かに考える会こと通称「静会」は短大創立から間もない 1970 年代初め「黙想会」を行いたいという学生からの要望を受け学内を会場に始められました。その後は世田谷区若林にあった「野菊の家」でクラス毎の小グループで行う長い歴史がありました。1992 年からは静岡県伊豆市湯ヶ島町のバプティ



中野島のカリタス修学院

スト教会施設、「天城山荘」に会場を移し2015年9月の最終回まで20年以上の間、1年生全員、二泊三日の合宿を行ってまいりました。

毎回のテーマは主に貧しい人、困窮の中で苦しんでいる人にまなごしを向け、共に生きることなどを中心に決めました。ビデオなどの映像によるセッションの他、施設の子供たちに贈るプレゼント作り、グループによる話し合いとグループ毎の発表、最終日には奉献式で全体を結びました。当初は浄蓮の滝への小散歩以外、殆ど室内だけの活動でしたが、近隣に樹齢四百年を超える「太郎杉」があることを知り、徐々に自然散策も重要な活動となりました。豊かな自然に恵まれた伊豆の山中を歩きながら静かで奥深い自然美を堪能、その素晴らしさからいのちの重要性を実感し、エコロジーや共生の問題を考えるよい機会ともなりました。



若林の野菊の家



伊豆の天城山荘

グローバル疑似体験

先進国、発展途上国との貧富の差への実際的な意識や感覚を持つことを目的としたこの疑似体験は、故石川裕之神父さまからの示唆で始まったセッションで静会の2日目昼食を中心に行いました。大陸別のエネルギー消費量を食事量に換算し、全世界を8グループ（テーブル）に分け、各自がくじを引いて富める国と貧しい国に着席し、それぞれその分量で食事をしました。「毎日、当たり前のようにする食事。だが、その



樹齢450年太郎杉



裏にはとてつもなく悲しいことがあると知った。お腹がすいていたが、出された食事はほんのわずかでつらかった。しかし、これが今、世界の一部にある現実なのだを受け止めた。好き嫌いをしている自分が恥ずかしくなった」とはある年の学生が残した感想です。通常の食事量を僅かに減らすことから生まれた経費の差額分は「差額献金」として発展途上国に送金しました。

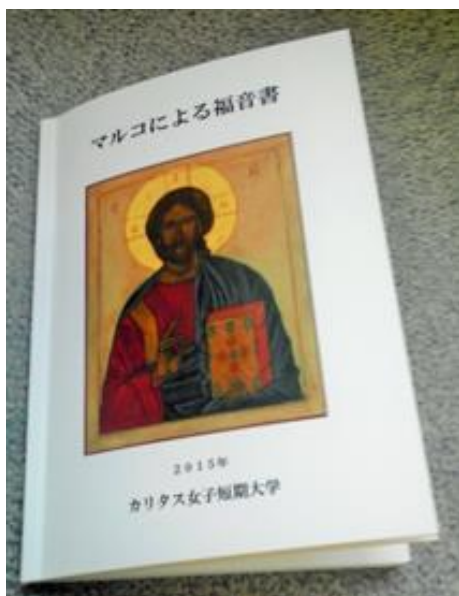
最終クラス（卒業ミサ）



長年チャプレンをされたナド神父さまが他界された直後、一時期ミサができない時代もありました。しかし、1月は次のステージへと旅立つ前の最終クラスとして「卒業ミサ」をずっと行ってきました。学生が作成した「共同祈願」はそのまま3月の学位授与式で「卒業生の祈り」として併用しました。

卒業ミサの意味は2年間で締めくくると同時に、将来の夢を書き込み「千羽鶴」を作成しこれを祭壇に奉獻するなど、卒業後のステージへと目を向け、そこに心を結ぶ契機でもありました。この「千羽鶴」はそのまま聖堂に飾り、聖堂で祈りがささげられる際、卒業生を思い出して一人ひとりの夢実現を祈ってまいりました。

おわりに・手書きによる「マルコによる福音書」



日本におけるケベック・カリタス修道女会の60年を超える教育活動を通して、その真髄にあったのは聖マルグリット・デュービルやメール、マルセル・マレの精神です。それは本学の「キリスト教人間学」の活動を通して、とりわけクリスマス会や静かに考える会などにおいて、福祉、奉仕、深い思いやりなどの精神として深く学生たちに忠実に伝達されてまいりました。短期大学の歴史はこの素晴らしい精神が爽やかに咲き誇り、連綿と生きていた50年であったと言えます。

全学年がまだ揃っていた最終年、2014年のキリスト教人間学クラスの中で、学生は勿論、全教職員も参加して全学で手書きによる「マルコによる福音書」を作成、クローデット・ベルニエ学長が描いたアイコンで表紙を飾り、翌2015年に無事にこれを完成しました。この「マルコによる福音書」は短期大学が消えた後も、本学が半世紀、50年の間、確かに現存していた見えるしるしとして学園本部に永久保存されることになりました。合掌・神に感謝！



第6章 学生の活動について

伊藤 知子

はじめに

1966年4月1日に開学したカリタス女子短期大学にとって、2016年は、開学50周年に当たります。短期大学が50年という節目の年を迎えることが出来たこと、そして同窓生である自分が短期大学の最後の日に向けて務めを果たすことが出来るのは、有難いことです。最後の卒業生となる学生達と過ごすあざみ野キャンパスでの日々は、かけがえの無いものです。

「CARITAS」は、「愛」を意味します。カリタス女子短期大学の教育はキリストの示された「愛」に基づく人間観、世界観を追求し神を「父」として、「兄弟となるよう」と呼びかけられたキリストの精神をもって「人類の真の幸福」の為に「奉仕する」人間性の育成をめざすものです。同時にケベック・カリタス修道女会の精神に生かされ、「愛の摂理」に対する信頼のうちにすべての人、特に「小さな人々」に対して心を開き、「平和な世界」の建設に貢献する「成熟した人間性」の開花をめざすものです。

学生部長の視点から、カリタス女子短期大学の行事、クラブ、学友会の中に建学の精神がどのように体现されてきたかを振り返ってみたいと思います。



オリエンテーション親睦旅行

オリエンテーション親睦旅行は、名称の変遷はありましたが、本学において30年以上に亘って実施されてきました。4月の入学時にオリエンテーション期間の最終段階において、1泊2日で行いました。宿泊先は、山中湖、河口湖、熱海、三浦などいろいろな場所でした。

その目的は友人作り、教員や2年生（学友会役員や各行事実行委員役員）との交流、履修の指導であり、その内容は教員紹介や2年生による各行事紹介、個人時間割表作成です。

夕食後には、1年生と教員や2年生との懇談の時間を設けました。新しい環境に入って不安な学生に対して、履修の指導のみならず、学生生活についての相談にも応じました。一人一人の学生を大切にするというカリタスの精神が生きている時間でした。

スポーツデー

5月に設定されているスポーツデーでは、学生たちが各チームに分かれて、競い合います。学年、教員と学生の壁を越えてスポーツ(バレーボール、バスケットボール、ドッジボール、借り物競走等)を通して交流する場となっていました。

学生主体の行事であり、スポーツデー委員が中心になって、計画と準備をしました。スポーツデーを通しての、新入生と2年生の交流、教員と学生の交流は、すべての人が兄弟姉妹になるようにという呼びかけに応えるものと言えます。近年は、親子でスポーツを楽しんでいる「チーム WITH」や青葉6大学の学生を招いて、地域との交流もしました。スポーツデーは、地域での人間関係を大切にすること、異なる人々との交わりを大切にすることを学ぶ場ともなりました。



青葉6大学及び WITH の方々と共に(2014年5月)

あざみ祭

10月下旬から11月に設定されているあざみ祭では、あざみ祭実行委員会を中心にして、クラス、授業、サークル、有志等それぞれの団体が催し物を行っていました。具体的には、サークルによる食品販売やカフェ、児童英語教室、授業によるポスター掲示、作品の発表、朗読の発表会、ファッションショー、ダンスのパフォーマンス、ビンゴ大会等が行われました。あざみ祭は、1年生と2年生の間のコミュニケーションを深めたり、友人間の人間関係を深めたりなどのよい機会となりました。また学生にとっては、自分から考えて動くことを学ぶ場となっていました。

2015年度のあざみ祭のテーマは、「CARITAS —愛・心からありがとう—」でした。CARITASの文字の中にAとIが含まれていることから副題に愛を入れて、「心からありがとう」というメッセージを添えたものでした。「愛」に基づく人間観を追求するという建学の精神を表わすテーマを、学生たちが考えてくれたことに感動しました。



CARITAS —愛・心からありがとう—(2015年11月)

あざみ祭の時に学友会は、2015年度まで長年に亘って、「かんぼれん」（カンボジアの友と連帯する会）の活動紹介をしました。「かんぼれん」とはカンボジアの人々の生活を支援するグループで、本学の学長補佐を務めたビセンテ・ボネット神父様（イエズス会司祭、上智大学名誉教授）が代表をなさっています。学友会の部屋では、ボネット神父様による講演とカンボジア・スタディ・ツアーに参加した学生による報告を行いました。学生たちは、自分たちの活動が、カンボジアの人たちの生活に役立っていることをうれしく思い、これからも支援を続けていきたいと語っていました。すべての人、特に「小さな人々」に対して心を開き、「平和な世界」の建設に貢献する「成熟した人間性」の開花をめざすという建学の精神をそこに見出すことが出来ました。

学友会

学友会役員は、入学式と学位授与式において係学生としての補助、オリエンテーション親睦旅行にヘルパーとして参加、新入生歓迎会の実施、あざみ祭への参加、学友会忘年会の実施、リーダー研修会への参加、卒業パーティーの実施などの活動を行いました。

学友会役員は行事の企画や実施、予算の作成や決算などの活動を通して、リーダーとしての資質を育成していきました。

また、学友会役員は、青葉区にある6つの大学の学生による青葉6大学の学生の活動にも参加しました。地域の清掃活動や青葉6大学まつりなどに参加することによって、地域に奉仕したり、地域の人々や他大学の学生と交流しました。学友会役員の活動は、「奉仕する」人間性の育成をめざすという建学の精神を体現するものでした。



「アオロク(青葉6大学)まつり」での学友会役員(2015年8月 たまプラーザテラスにて)

クラブ

カリタス女子短期大学には文化系と体育系のクラブがあり、活動に参加した学生は有意義な時間を過ごすことができました。アンジェラスの会（ボランティア）、English Lunch Club（英会話）、茶道に親しむ会、C-girls(ダンス部)、バースデーボードクラブ（誕生日を祝う掲示を作成）、パティスリ・アミュザント（お菓子作り）のように、長い間活動を続けている伝統のクラブがあるのは、うれしいことです。クラブは、教員が顧問となり、活動をサポートしていました。あざみ祭やクリスマス会等で活動の成果を披露することは、学生たちにとって励みになっていました。

建学の精神である奉仕する人間性と愛の心を体現する活動を行っている2つのクラブ、アンジェラスの会とバースデーボードクラブについて紹介します。アンジェラスの会は、ボランティア活動を行うクラブで、東日本大震災の際には、率先して募金活動を行いました。あざみ祭では手作りジャムなどの販売を行い、その売り上げを施設や団体に寄付をしています。

バースデーボードクラブは、毎月、誕生日を迎える学生の写真をバースデーボードに貼り、お互いに誕生日を祝い、生まれてきたことに感謝しました。学生の誕生日が分かるので、学生同士や教職員が「お誕生日おめでとう！」と声をかけて、カリタスならではの温かい交流をすることができました。

おわりに

今回、行事、クラブ、学友会について振り返ってみると、その中に建学の精神が大変良く生かされていることを実感しました。目に見える形としてのカリタス女子短期大学は無くなりませんが、ここで学んだ卒業生たちの中にカリタスの心は生き続けることでしょう。建学の精神について考察し、カリタス女子短期大学の歴史を振り返る機会を与えられたことに感謝して、結びとしたいと思います。



学生玄関そばの大きなバースデーボード

第7章 地域との絆を求めて

加藤 美保

カリタス女子短期大学の重要な役割の一つとして、地域社会への貢献があります。大学が「知の拠点」として地域社会での教育・文化の中心となり、研究成果を還元し、地域の発展に寄与することは、今や、どの大学にも欠かせない重要事項です。本学は「より開かれた短大」として、いち早く地域の皆様に向けた各講座を開講し、行政や他の大学・高校と連携した活動を行うなど、地域に密着した活動を展開しました。ここで、幅広い本学の地域における活動を、あらためて思い起こしてみましよう。



オープンカレッジ —「プティ・コレージュ」「公開講座」 「海外研究シリーズ」「横浜フランス月間」—

★「プティ・コレージュ」が始まったのは1988年でした。その趣旨は、これからの大学は地域に開かれていることが強く望まれており、そのためには地域社会の教養向上に貢献すること、という点にありました。講座内容は時代とともに変化もあり、当初、英会話一般、英会話中学生、英会話小学生、フランス語会話一般、聖書を味わう集い、茶道、華道、などが開講されました。その後、源氏物語、フラワーデザイン、英語でニュースを読む、フランス語でニュースを読む、英語で歌を歌おう、ハングル語講座など、講座の種類も増え、多くの受講生に学びの場を提供することができました。基本的には本学の専任教員と非常勤講師が担当し、アットホームな雰囲気なかでの質の高い講座は、開講当初から高い評判をいただきました。



「英語で歌を歌おう」青葉区役所コンサート

★「公開講座」は1989年に、横浜市教育委員会との共催で「横浜社会人大学講座」として横浜市内の各大学とともに開講しました。2004年からは、装い新たに本学単独のかたちで「カリタス女子短期大学市民講座」として再スタートしました。講師は本学の専任教員、非常勤講師、そして学外の著名な方などで、9月以降の土曜日10回前後の講義は、毎年楽しみに何年も続けて受講される方が多くいらっしゃいました。

この公開講座は、初年度のテーマ「文化のトライアングル —異文化と日本を考える—」から、最終回の2015年度のテーマ「さまざまな最終講義 —カリタスにおける教育と研究活動の彩り—」まで、多様でありながらも、「カリタス」(「愛」)の精神をしっかりと踏まえた講座内容だったと言えます。

★「海外研究シリーズ」は2003年から始まりました。前述の「公開講座」はあまり専門に偏らない幅広い内容を講義するスタイルでしたが、この「海外研究シリーズ」は「あざみ野から世界が見える」をキャッチフレーズに、一つのテーマをより深く、より専門的に掘り下げる、という方針をとりました。たとえば、「カナダ研究講座」「中東との対話」など。受講者も20名～50名とほどよい人数で、講師との濃密な授業を味わい、あるいは講義後も歓談を楽しむ、という様子も見られました。

★2005年に横浜市の主導により始まった「横浜フランス月間」は、日本で唯一の大規模なフランス文化の祭典で、毎年6月半ばから約1か月、横浜は粋で華やかなフランス色に染まります。本学は2006年よりこの“祭典”に参加。「フランス語であそぼ」に始まり、その後「講座フランスを知る」シリーズを仏語・仏語圏文化専攻（コース）の専任教員中心に開講。パリを語る、エッフェル塔、フランス歌曲、フランス文学などの講座を実施しました。地域の方はもとより、多くの卒業生にも受講していただき、大変盛況でした。

★上記の各シリーズ以外にも、2008年8月、NHKのテレビ講座アラビア語会話の講師アブドゥラ氏を招いての言語文化特別講座「アラブの世界、そこが知りたい ～言語と文化を通して～」、2012年10月、桐蔭横浜大学との共催「幸せの国ブータンの魅力～



ブータン講座
講師：日本ブータン友好協会理事・
本学司書 石田孝夫氏

小国のアイデンティティから学ぶもの～」、2014年2月、映画『ももいろそらを』上映会とトークショーなど、タイムリーな話題の講座を企画し、参加された地域の多くの皆様に高い評価をいただきました。



『ももいろそらを』上映会
主演：本学学生 池田愛さん

高大連携夏季講座

神奈川県内の総合学科を有する高等学校との教育交流協定を締結したのは2009年。その目的は、「高校生の視野をひろげ、進路に対する学習意欲を高める」とした高校と大学との教育交流にありました。具体的には、本学の教員が、毎年夏季休暇中に合計5日間、延べ35時間、高校生（男子生徒も受講可）向けに専門性の高いテーマを噛み砕いて講義するという内容で、大学の授業にはこういう面白さがあるのか、という啓発的な意味もありました。

テーマは毎年変わっていましたが、一貫していたのは、本学の特色を生かした“国際理解”に重心が置かれていた点です。たとえば、「コミュニケーションと異文化世界」「新しい国際理解を求めて」「地球文化との触れ合い」など。この講座を受講したのがきっかけで、その後本学に入学した学生もおりました。



高大連携夏季講座 修了式

社会人学生の受け入れ

本学では早くから社会人学生を受け入れてきました。正規学生として、科目等履修生として、聴講生として、そして子育てが一段落した方や定年を迎えた方などが、語学力の向上や教職資格取得や四年制大学への進学、あるいは留学など、明確な目的をもち、授業料を払う価値のある大学として本学を選びました。近くで学べるからと青葉区の方も多く、派遣奨学生として海外留学したり難関四年制大学へ進学を果たしたりと、その真摯な学びの姿勢は間違いなく若い学生に良い影響を与えたと思われます。毎年5月には、「社会人学生の集い」という茶話会を実施し、仲間や教員との絆をいっそう深めました。



社会人学生との集い

大学間連携・行政との連携

本学は神奈川県、横浜市、青葉区等、地域と関連する協議会に参加し、大学間連携や地域自治体・行政との連携を深めてきました。

神奈川県内 67 大学が参加する「かながわ大学生涯学習推進協議会」では、年に一度「生涯学習フェア」を開催。本学はフェアの企画立案に深く関わり、体験公開講座の講師の派遣、個別相談コーナーの担当など、県内の「生涯教育」の質向上に寄与しました。また、「日本カトリック短期大学連盟」「神奈川県私立短期大学協会」「神奈川県私立学校教育振興会進路指導連絡協議会」では高校生向けのイベントや教職員同士の研修会等で連携を深めました。

「横浜大学・都市パートナーシップ協議会」は 2005 年に発足しました。社会人向けの「横浜学☆遊フェア」「ライブラリー・カフェ」等の講師として本学教員を派遣。また、「ヨコハマ大学まつり」では小学生向け講座、中学生向け講座、クイーンズスクエアでの学生のダンス発表など、教職員だけでなく、学生も楽しみながら積極的に協力してくれました。



ヨコハマ大学まつりフランス語であそぼ！



青葉 6 大学 クリーン大作戦

青葉区と区内 6 大学（カリタス女子短期大学、國學院大学、玉川大学、桐蔭横浜大学、日本体育大学、横浜美術大学）が連携協定を結んだのは 2010 年。連携事業として毎年「6 大学バスツアー」「6 大学連携講座」「あおば 6 大学まつり」と各種行事を開催、青葉区の皆様に本学を身近に知っていただく良い機会となりました。また、学友会の学生は 6 大学の学生会議に参加、各大学の地元を清掃する「クリーン大作戦」や「あおば 6 大学まつり」の企画運営実施に携わり、活動の幅を広げ、大学間の絆、地域との絆も深まりました。

地域の団体の活動拠点として

本学はあざみ野駅から徒歩7分と好立地のため、地域のさまざまな団体の活動拠点として場所を提供してきました。テニスコートはスペシャルオリックス（知的障害者のためのスポーツプログラム）やあざみ野中学校、元石川高等学校のテニス部が使用。体育館はチームWITH（青葉区の母子体操サークル）や青葉区こどもミュージカルの活動拠点として、また、あざみ野連合自治会主催のあざみ野音楽祭、あざみ野中学校合唱コンクール、近隣の中学校の吹奏楽部発表会、近隣の幼稚園や保育園の運動会など、観覧席もある広い体育館は大変親しまれていました。大教室や普通教室も映画上映会や講演会、地域ケアプラザの「あおばイキイキ元気塾」の会場となっていました。週1度は施設「愛」（知的障がい者支援施設）自家製のパンの学内販売もあり、各イベントや活動では、学生がボランティアとして会場設営や運営のお手伝いをしたり、教員が審査員として参加するなどの交流が生まれました。



あざみ野音楽祭
本学卒業生の弾き語り

地域の方とともに



あざみ祭 キッズABCルーム

本学のクリスマス会は、あざみ野にキャンパスが移転した当時から、地域の一人暮らしのお年寄りや福祉施設の方をお招きし、ご一緒にお祝いするのが伝統になっています。近年は、いろいろな方が学内で活動することが増え、学生の発案で、スポーツデーにチームWITHやアオロク（青葉6大学）の学生を招いたり、クリスマス点灯式を近隣の方と一緒にお祝いをしたりしました。秋の大学祭「あざみ祭」では前田隆子先生担当「児童英語研究」の学生が「キッズABCルーム」を開催、小学生に楽しく英語を教えるこのコーナーは毎年大好評でした。また、小林美恵子先生担当「朗読ゼミ」の学生が幼稚園や保育園、老人ホームを訪問して「読み聞かせの会」を開催するなど、相互の交流が増えました。



朗読ゼミ 保育園での読み聞かせ会

おわりに

カリタス女子短期大学は、以上のように地域のさまざまな立場の方や団体が、本学で学んだり活動したりすることを積極的に支援・協力してきました。同時に、学生や教職員も地域の方との交流を深めてきました。こうして地域の発展に貢献したことにより、2014年11月青葉区制20周年記念式典にて、バルニエ学長が青葉区政功労者として表彰されました。これは、本学が地域から評価されていることの証といえましょう。

カリタス女子短期大学50周年のうち35年は、あざみ野の地で築いてきた歴史です。地域の皆さんの数々の思い出の中に、カリタスが生き続けていくことを願ってやみません。

カリタス女子短期大学の背景

小林 順子

(清泉女子大学名誉教授)

フランスの社会システムを受け継いだケベック

カリタス女子短期大学を設立したケベック・カリタス修道女会は、当時フランス領であったモンリオールで、マルグリット・デュービル（1701-1771）が支援を必要とする人々に手を差し伸べるために創立した会を母体とした修道会です。モンリオールを含みケベック市を首都とするケベック州は 1763 年に英国領となっても 1774 年のケベック法によってフランス文化を保持続けることが認められ、英国領カナダにあってフランス的社会を存続させてきました。換言すれば、フランス的社会システムが基盤となって構築されてきた社会です。



フランス的社会システムの中でケベック社会にまで影響を与えた要素の一つは、教育行政における政教一致でした。フランク王国時代（5～9 世紀）のシャルルマーニュの勅令に始まり、その後もキリスト教会に学校教育を委ね続けてきました。カナダに植民地ヌーヴェル・フランスを築いた 17 世紀にも、ルイ 14 世はこの政策を王令によって確認しています。すなわち、教会のすべての教区にこども達に教える男性教師と女性教師を配置することを義務付けました（1698 年 12 月 13 日の王令）。すでに 1640 年にルイ 13 世は男性教師が女子を、女性教師が男子を教えることを禁じていました。フランスの教会は、この王令に従って、教員の認可、監督、罷免を司教または司教代理に委ね、校則の認可も行っていました。当時のフランスはいわゆるガリカニズムの時代でした。

この教育におけるカトリック教会の役割と男女別学制度は、フランスの植民地となったカナダの土地ヌーヴェル・フランスにも適用されました。そこでも、教員選考規則の制定、学校視察、宗教の教理教育、教育に献身する修道会の認可などが教会の司教の任務とされました。国が教育を教会の役割と定めて以来、次第に修道会がその任にあたるという慣習が成立、これもヌーヴェル・フランスの慣習となっていきました。

社会福祉に献身したフランソワ・シャロン

ルイ 14 世による積極的な植民地政策によって、この植民地のフランス人の人口が増加していきました。それと同時に社会福祉の需要も増加しました。この需要への対応の中に、後にマルグリット・デュービルが引き継ぐことになったシャロン会がありました。シャロン会の創立者フランソワ・シャロン（1654-1719）は裕福な事業家でしたが、病気になったときにもしも治癒したなら貧しい人々のために尽くすと誓いました。幸い病は治りましたので誓いを実行に移し、1692 年モンリオールに “hôpital”（オピタル）を設立しました。これは英語の “hospital” に対応する用語で通常「病院」と訳されますが、ここでは、貧困など生活に困窮している人々を受け入れる施設を意味していました。1694 年、ルイ 14 世はこの「オピタル」を認可しました。その認可の内容には「貧しい子ども、孤児、手

足に障害のある者、老人、病人、そのほか困窮している者を住ませ、食べさせ、支援し、適当な仕事をさせ、子どもには職につくために必要なことを学ばせる」ことを目的とすることが示されていました。これはシャロン会の認可ではなく、**Communauté des Frères Hospitaliers**（通称シャロン会）を修道会として同じ年に認可したのは教会の司教でした。なお、1707年、修道会としての認可を国王に申請していますが認められませんでした。当時、国王から認可を受けた教育修道会やオピタルなどには下賜金がありましたので、財政上、認可を得ることは容易ではありませんでした。

それでも、シャロン会の事業は各方面からの援助によって発展しました。「オピタル」の目的に示された人々を受け入れる一方、孤児などを対象とした初等教育課程、職業教育課程、教師養成課程を設置しました。シャロンは特によい教師の重要性を指摘し、よい教師を求めてフランスへ何度か渡るなど努力を惜しみませんでした。その成果は思わしくありませんでした。彼はこの旅の途中で他界しました。シャロン会は後継者に引き継がれ、フランスから教師が渡来、1722年、遂に修道会として国王から認可されました。この修道会の会員になるときに行う誓願には「貧しい人々への支援と青少年の教育」に献身することが含まれていました。しかし、その後の事情によって運営が困難となり、1747年、マルグリット・デュービルに引き継がれることとなりました。ただし、男子を対象とした教育事業は引き継ぎませんでした。マルグリット・デュービルは1737年に同志と共に生活に困窮した人々に奉仕するための会を設立していました。この会が修道会として正式に認可が下りたのは1753年でしたが、その奉仕活動は既にモンリオール・カリタス修道女会として社会に認められていましたので、同じ趣旨で創立されたシャロン会の事業を引き継ぐのに適していました。「カリタス」(charité)は「愛徳」、「他人を愛する」を意味する語でした。



マルグリット・デュービル(1747年)

ケベック州の教育事情とカリタス修道女会の学校

モンリオール・カリタス修道女会はその活動が社会的に高く評価され、次第にカナダ全土に、そして国外へも、広がっていきました。当時、修道会が他の地に会員を派遣するとき、本部と分院という関係ではなく独立した修道院となり、名称もたとえば「〇〇・カリタス修道女会」と変更されました。これは既にフランスで行われていた慣習でした。この慣習に従って、1849年にケベック市に派遣された会員によって設立された修道院はケベック・カリタス修道女会となりました。この慣習はその後廃止されています。当時、ケベック市では伝染病が蔓延し、病で親を失った子ども達の世話が急務であったようです。こうして、ケベック・カリタス修道女会は従来のカリタス会の奉仕活動のほかに、この子ども達に読み書きを教える活動にも専念し、次第に教育活動を発展させていきました。

英国領となったカナダの中でフランスの社会文化を存続させてきたケベック州では、学

校教育もカトリック教会の教区学校が、カトリック教育委員会（原語の直訳は「学校委員会」）の管理運営する学校として、子ども達の教育に当たっていました。いわば、公立学校の性格を有していました。カリタス修道女会は修道会として私立学校を設立経営するというよりは、これらの教区学校の管理運営を担う場合が多くなっていました。1867年、後に「1867年憲法」と改称される「英領北アメリカ法」が制定されたとき、第93条によって教育の州自治権が認められ、その条文には「連邦成立時に当該州法によって一定の者に与えられた宗派学校に関する権利または特権に不利な影響を与えないこと。」という文言が含まれていました。この条文によってカトリック教育委員会管轄下の学校はカトリックの宗派学校として存続が認められ、カリタス修道女会の教育活動も存続、発展していきました。

1960年にケベック州では「静かなる革命」が起きました。この革命で最も大きな変革があったのは教育行政における政教分離でした。フランス革命以前にフランスから移植された教育行政における政教一致の終焉でした。ケベック州の教育行政はカトリック教育委員会とプロテスタント教育委員会に分かれて行われてきました。したがって、この政教分離政策によって各宗派の教育委員会管轄の学校は州教育省の管轄下におかれ、その管理運営にあっていた修道会はその学校を手放しました。中には公立学校教員として勤務を続ける会員もありました。なお、教区学校としてではなく修道会が経営していた学校は私立学校として存続することは可能でした。

カリタス修道女会は、あらゆる社会層の子ども達を対象とした教区学校の大きな部分を担ってききましたので、この革命によって活動を大幅に縮小されることになりました。対象を限定せずに支援を必要とする人々に手を差し伸べるというシャロン会とマルグリット・デュビルの精神は、新設された州教育省の世界的に見ても寛大な無償制度の拡大、教育内容の現代化、宗教教育の選択科目としての存続などを実現した教育改革に、いさぎよく道を譲り、あらためて一教員としての勤務や行政の行き届かないところでの支援などに向かいました。

これまで述べてきたように、ケベック・カリタス修道女会はケベックのフランス系社会の底辺を支えるだけでなく、学校教育を通してその発展に寄与し続けてきました。そして、社会のニーズが変化したときに、存続のための存続を選択することはありませんでした。



ケベック・カリタス修道女会本部修道院

ケベック・カリタス修道女会の日本での活動

時宜を得たカリタス女子短期大学の設立

これまで述べてきたように、カリタス女子短期大学の経営母体であるケベック・カリタス修道女会は教育を主要目的として創立されたいわゆる教育修道会ではありませんでした。その創立趣旨はもっと広い視野に立って支援を必要とする人々に手を差し伸べることでした。フランスの植民地からイギリスの植民地となっていく激動の時代から移住者が増加し続ける時代へ、カナダが移民国家として安定していく過程にあって支援を必要とする人々に尽くす一手段として、様々な理由で孤立してしまった子供たちを受け入れ育てるために読み書きを教える必要もでてきました。こうして学校教育も引き受けるようになったのです。

このような目的意識を根底に持つこの修道会が、戦後の日本が復興していく途上に来日したのは時宜を得たことだったに違いありません。ケベック・カリタス修道女会の来日は1953年でした。ちょうど日本の戦後復興が軌道に乗り始めたころでした。戦後の日本が復興していくには多くの課題がありました。学校教育の問題もその一つでした。戦後の学校教育には学校制度改革の中核となった6-3-3制への移行、義務教育の8年から9年への延長、子供人口の急増、進学率の向上などへの対応、そして、財源の確保という深刻な課題が山積していました。

進学率の向上は、高等学校の場合、女子は1950年36%、1955年47%、1960年56%、1965年70%、大学への進学率は1955年男子13%、女子2.4%、1960年男子14%、女子2.5%、1965年男子21%、女子4.6%、1970年27%、女子6.5%という状況でした。大学への女子の進学率は向上していったとはいえ男子の約5分の1です。当時、女性は学問をすすめるものではないという通念がまだ根強く残っていたからでしょう。そこで高等学校卒業後も勉強を続けたい女性の多くが修業年数の短い短期大学に進学し、その進学率は1955年2.2%、1960年3.0%、1965年6.7%、1970年11.3%と女子の4年制大学進学率より高いまま向上し続けました。女子の在籍者数は、18歳人口の急増も伴って1965年には1955年の約3倍になっていました。この間、国公立の短期大学数は10校ほどしか増加していないにもかかわらず、私立校は約100校も増加しています。この増加に比例するがごとく在籍者数も増加しているのは、それだけ需要があるということの意味していたのでしょうか。ケベック・カリタス修道女会の短期大学設立は、この私立の女子短期大学の需要に応えたのでした。

よりよい教育を目指して

「学校教育法」は短期大学の目的について、大学のために規定された目的に代えて、「深く専門の学芸を教授研究し、職業又は實際生活に必要な能力を育成することを目的とすることができる」（百八条）と定めています。社会の高度化にともなって社会人として生活していくために要求される個人の能力の高度化も進み、従来の大学とは異なった理念の高等教育機関として「職業又は實際生活に必要な能力」の育成の需要に応えた短期大学は、カリタス会の社会に適応して生活していけるように支援するという目的意識に合致するので

はないでしょうか。設立以来の教育活動の歩みをたどってみますと、学生たちが現代社会で生き抜いていかれる能力を身に着けさせようと、さまざまな工夫が精力的になされてきていることに気がきます。しかも、一定の職業のための準備というよりは、卒業後個性に見合った未来を選択する可能性をはぐくんだように思われます。このことは卒業生の進路の多様性が物語っています。

このように、カリタス女子短期大学は少しでもよい教育をするように真摯な努力をしてきました。在学期間はわずか 2 年間ですが、若い女性が自律の精神を有する社会人として生き抜くための何かしっかりしたものを掴むことができるように、教育環境の醸成、教育課程の工夫などに誠実な努力がなされたのでした。こうして、ケベック・カリタス修道女会は戦後の日本の復興に、そして、その後の発展に寄与してきたのでした。

おわりに：苦渋の決断

しかし、社会情勢が変化するとともに、女子短期大学を取り巻く環境も厳しくなってきました。女性観の変化、高等教育政策の転換、18 歳人口の減少など、多くの要因を指摘することができます。女性の高等教育への進学率は着実に伸びていきましたが、統計は 4 年制大学への進学率の増加も示し、1996 年には大学進学率が上回り、それ以降、女子短期大学への進学率は減少していきました。2015 年には女子の大学進学率は 47%、短期大学進学率はわずか 9.3%となりました。この現象にともない私立短期大学数も減少に向かいました。1999 年には約 500 校ありましたが 2015 年には約 320 校となっています。それでも定員を満たすことは困難になりました。ケベック・カリタス修道女会が女子短期大学を設立したときの社会的需要が変化したのでした。この存続そのものが危ぶまれる厳しい社会状況にあって、もし閉学が選択された場合、母校を失う卒業生の心情、献身的に職務を遂行してきた教職員の処遇の問題など、深刻な問題を抱えながら解決策が模索されたのでしよう。

このような状況の中にあつて、カリタス女子短期大学は閉学という苦渋の決断をくだしたのでした。募集停止のままで存続し、機を見て募集を再開する道もありました。しかし、この「機」が何時到来するのか、予測は簡単ではありません。また、この「機」がきても、社会環境が大きく変化している可能性は大で、それに対応する新たな「何か」が求められ、新たな対応が必要となっていることでしょう。けれども、ケベック・カリタス修道女会が数百年も持ち続けてきた精神、行政が対応しきれない支援の必要な人々を温かく支え援助する精神は、このカリタス女子短期大学から巣立った卒業生の心に根付き、やがて何らかの方法で実を結んでいくのではないのでしょうか。



小林先生(右)とベルニエ学長(学長室にて)



IV 国際性を求めて

第9章 語学力を実践的に生かす機会を求めて —英語圏への留学から—

北川 宣子

カリタス女子短期大学のユニークな特色として挙げられるのは、充実した留学制度でしょう。本学の伝統ある英語・仏語の語学教育を大きくサポートしてきたものの一つに海外への派遣奨学生制度があります。これは「建学の精神」でも述べた、特色あるカリキュラムやきめ細かい学生支援体制とともに、学生のニーズに応えつつ、その形態を変えていきました。そして、この留学制度が学生をさらに大きく成長させ、世界に目を向けるきっかけ作りとなり、その結果、本学が国際的に通用する多くの卒業生を送り出すことにつながったのです。

ところで、カリタス学園には、卒業生の保護者の方々の「賛助会」という支援組織があり、短期大学の学生に長期派遣の奨学金の支給をして頂いています。留学の主な趣旨は、在学中身につけた語学力に磨きをかけ、海外での未知の世界を体験することにより国際感覚を育み、さらに知的・人間的成長を培う、という点にあります。その意味で、この賛助会の役割は学生にとってはかり知れないほど、大きなものとなっています。

英語の長期派遣奨学生制度

1974年、本学があざみ野キャンパスで新たなスタートを切る7年前に、本学はアメリカ・イリノイ州のルイス大学(Lewis University)と姉妹校として提携を結びました。そして留学を夢見て入学した学生のなかから1名が選抜され、卒業と同時に派遣奨学生として3年次編入留学の機会が与えられ、派遣先の大学を卒業するまでの2年間の授業料が先に述べた



米国ルイス大学に留学した卒業生(女子学生寮前で)

「賛助会」より贈呈されました。この光栄な機会を得て留学した学生は、卒業に必要な単位を修得することで当大学から Bachelor of Arts という学士号が授与されたのです。そして、徐々に本学の提携校は増え、アメリカ・ニュージャージー州の聖エリザベス大学(The College of St. Elizabeth)、フェリシアン大学(Felician College)や、同じくアメリカ・ニューハンプシャー州のリヴィエル大学(Rivier College)など、私費留学先としての選択肢も広がっていきました。



米国・聖エリザベス大学に編入した学生 2 名
(中央列右から 2 番目と 4 番目)

コミュニケーション文化専攻(以下 コミュニケーション専攻という)の学生 1 名には一足早い 1996 年より、1 年間の長期派遣留学の機会が与えられるようになりました。これと同時に、英語専攻の学生の長期派遣先は、これまでのアメリカから 1 年で修了するのに適しているイギリスへと変わりました。そしてコミュニケーション専攻の学生には新たに提携を結んだカナダ・ケベック州のマギル大学(McGill University)に、後にはカナダ・オンタリオ州のクイーンズ大学(Queen's University)に派遣することになりました。これに伴い、これまで卒業生を派遣奨学生として送り続けたアメリカの大学は、卒業後の私費留学先へとその役割が変わっていきました。この理由の一つとしては、アメリカの大学と日本の大学のシステムが類似しているため、編入留学もスムーズにできたことにあります。

さてイギリスの留学先の選定と拡張には、イギリス人であるパトリン・保田先生の献身的な働きがありました。その主な派遣先は、リバプールホープ・ユニバーシティーカレッジ(Liverpool Hope University College)、ウィラルメトロポリタン・カレッジ(Wirral Metropolitan College)、チチェスター・カレッジ(Chichester College)、ギルフォード・カレッジ(Guildford College)、ニューカレッジ・ノッティンガム(New College Nottingham)など多くが挙げられます。

さらに、アメリカ・オレゴン州のメリルハースト大学(Marylhurst University)も新たに加わり、学生はこの数多い大学のなかから、留学委員会の教員のアドバイスを受けつつ、自分の関心に沿った派遣先を選ぶことができました。われわれ留学委員の役割は、単に留学先を紹介だけでなく、提携校と頻繁に連絡を取り合い、またお互いの大学を訪問するなど、日頃からコミュニケーションを密にし、学生が安心して留学できる関係性を築き上げていくことでした。そのなかでも、とても温かいお人柄で、アイデア豊富なチチェスター・カレッジのピーター・ブラウンさん(現在は引退

その後、留学希望の学生が増えてきたこと、また、帰国後の学生の進路指導の強化も鑑みて、本学が言語文化学科として改組転換したのを機に、少しでも多くの学生に留学の機会を、というわれわれの願いが受け入れられました。1998 年度の入学生より英語・英語圏文化専攻(以下 英語専攻という)の 1 年次修了の学生 2 名に、そして改組転換により新たに設置された



米国 聖エリザベス大学に編入後、卒業した卒業生
(両親と学部長のシスター・アン)



米国・聖エリザベス大学学長と
(左が保田先生・中央が筆者)

されましたが)の存在は大きく、パトリシア・保田先生と共に私がチチェスター・カレッジに訪問した際にも、その心のこもった歓迎に接し、仕事を越えた温かい交流を持つことができた実感しました。また、本学がメンバーとなっている GCN (Global College Network) —さまざまな国の大学が提携を結び、お互いに授業料を免除して留学生を受け入れる組織—というネットワークを立ち上げたのも、このピーター・ブラウンさんだったのです。



留学プログラムの紹介の為に来学された
ピーター・ブラウンさんと学生たち



イギリス・チチェスター・カレッジで開かれた 2007 年の GCN 会議に参加して
(後列左から 3 番目がピーター・ブラウンさん、後列中央がパトリシア・保田先生、前列左から 2 番目が筆者)

さて、コミュニケーション文化専攻の学生のカナダへの派遣は、2009 年のコース制への移行に伴い、ひとつの転機を迎えます。すなわち、新設の社会文化システムと現代コミュニケーションの両コースの学生を主対象に、後に触れるように、体験を中心とした新しい海外留学制度へと変わっていくことになります。

そして本学の学生間の留学ブームは、後に若者たちが内向き志向と言われる時代がきても、衰えることはありませんでした。英語・英語圏文化コースの学生対象の長期派遣奨学

生制度は、その後も継続され、たくさんの奨学生を海外に送り出しました。ところで、この在学中1年間の派遣奨学生制度に変えたわれわれの意図は、できるだけ多くの学生に貴重な留学体験をしてもらいたいということにとどまりません。帰国後の学生の留学成果を見届け、同時に卒業に向けた進路（就職・進学・さらなる留学）指導の手助けができる、というメリットも考えたのです。そして、この制度は今年（2016年）の夏に帰国した最後の英語長期派遣奨学生に至るまで続けました。

英語の短期派遣奨学生制度

本学には、他に短期派遣奨学生制度がありました。これは本学が英語・英語圏文化専攻（のちに、「専攻」から「コース」へと移行）の学生の短期留学の費用を支援するもので、1年次在籍の選抜された学生4名が、春期休暇中に1ヵ月から3ヵ月の期間、海外に派遣される制度です。授業のない春休みを利用するこの制度は、長期派遣奨学生のように休学をせずに行けるため応募者は比較的多く、競争率も高かったと記憶しています。短期とはいえ、できる限り長い期間留学したいという学生の希望に応えるため、われわれは知恵を絞り、「3ヵ月留学」をも企画したのです。しかし、いざ実施となると授業を休まずに3ヵ月もの留学期間を確保するのは容易ではなく、本学の学期の途中で留学を開始するため、例えば期末試験は海外で実施するというような工夫が必要でした。この際にも、こちらの要望を快く承諾し、フレキシブルに対応してくださったのが、先に述べたチチェスター・カレッジのピーター・ブラウンさんだったのです。その協力を得て、これまで何名もの学生がこの「3ヵ月留学」を成功させました。カリタスには、いつもこのように教員が工夫を凝らしながら、少しでも学生のニーズに近づけようとする姿勢があるといえるでしょう。

もう一つの海外語学研修

さて、上記の短期派遣奨学生制度は選ばれた少数の学生たちに与えられた機会ですが、本学には、一度は留学体験をしてみたいという夢を抱いて入学する学生が多くみられました。今でこそ、留学エージェントを通して、気軽に語学研修が体験できますが、カリタスでは35年以上前より、希望する学生が誰でも安心して参加できる語学研修を企画していたのです。研修先として第一回目は、夏期休暇中にアメリカに、その後夏にイギリス、春にオーストラリアの英語海外研修というように、1年に2度も実施していた時代がありました。そのうえ、毎年のように参加者が



イギリスの英語研修に参加した学生たちと引率の保田先生

30名を越えた時もあり、教員は交代で引率していたことを今では懐かしく思い出します。

ところで、英語・英語圏文化コースでは、1年次の冬期休暇中に、国内においても留学を疑似体験するユニークなプログラムとして、福島県・新白河のブリティッシュヒルズ（英国村）にて一泊二日の体験学習も企画・実施しました。これは学科全体の学生を対象とし、英語圏の異文化体験を通して、留学の心得を体験的に学び、同時に英語学習に対するモチベーションをより高める目的のもので、学生の国際理解・異文化理解の強化に、われわれが



リフレクトリー(ダイニングホール)で正装してディナー
(福島県・ブリティッシュヒルズにて)



国内で異文化体験を満喫する学生
(福島県・ブリティッシュヒルズにて)

そして、今、さまざまな形態の留学を体験した学生が、それをきっかけに多方面で活躍しています。海外で教育に携わる者、海外の企業で働く者、国内の教育機関で働く者、国内の企業で英語を駆使して働く者、そして、海外で修業し、それを日本で生かしている者など、われわれが知る限りでも、数えきれないほどの卒業生が目に見えてきます。カリタス女子短期大学が蒔いた種が50年の歴史のなかで、大きく成長し、花を咲かせ、実を結んでいることに改めて大きな喜びを感じています。

多方面から力を注いできたことを最後に書き添えたいと思います。

このように多様な留学の機会の提供により、カリタス女子短期大学の「建学の精神」を基盤として、「国際性を求めて」という教育理念に基づき、「国際的視野」に立って行動することのできる力を持った人材の育成が長きにわたり実践されていったのです。



フランスで修業し、パティシエになった卒業生のお店の前で
(三浦に親睦旅行に行った帰りに立ち寄った教員たち)

前列 左から 筆者、卒業生

後列 左から 平先生、前田先生、浦野先生、小林先生

第 10 章 フランス語・フランス語圏文化

－留学と編入学。続ける学び。内なるカリタス－

稲葉 延子

1983年に発足した仏語科（当時の専任教員4名 アガタ・ベルニエ、リュセット・センドン、樋口仁枝、稲葉延子）は、早稲田大学教授の岩瀬孝先生を初めとする非常勤講師の方々も含めて、第一期生25名の学生の指導にあたることになりました。3年目からは、スール・リュセット・セendonに代わり、エリック・ボグナール先生が非常勤講師から専任教員に加わり、他大学にはない、音声学の専門家による「フランス語音声学」の授業が充実いたしました。卒業生たちが習得した発音の良さは、とりわけ国内の四年制大学において驚かれ高く評価されました。もちろん、本場のフランス語圏においても学生たちの発音は立派に通用いたしました。

非常勤講師のネイティブ・スピーカーは、常に2、3名在職しておりましたので、さまざまなフランス語を聴く機会が学生たちにはあり、これも他大学にはない贅沢な学び舎でありました。また、日本人の非常勤講師の方々は比較的若く、フランス語教育のみならず、それぞれ自分の専門分野をもち、論文を書いたり、国内外の学会で発表をしたり、と、優秀な研究者としても育っていきました。学生たちは、その姿をまのあたりに見ていたことになりませんが、卒業生たちの中には、大学院まで進学した人が何人もおります。1998年には、スール・アガタ・ベルニエに代わり、18世紀フランス文学が専門の北垣潔先生が専任教員となり、精力的に進学指導にあたり、更なる実績をあげていきました。



専任教員 4 人 1985 年



フランス語教員 2004 年

あざみ野からフランス語圏へ

仏語科設置当時、フランスへの留学は「比較文化」講座の一環としての短期語学留学はありましたが、留学制度のさらなる充実を図り、英語科同様に、長期の奨学生制度を設定し、学生を派遣することとしました。1985年、アミアンで語学研修する学生たちの引率中の筆者は、フランスのアンジェ・カトリック大学（Université Catholique de l'Ouest）を訪問し、契約を取りつけることができました。この地は、岩瀬教授が、1950年に戦後初のカトリック奨学生として学ばれたところで、教授からのお口添えもあり実現したのです。本学では、仏語科三期生がその一号となり、寮はFoyer Notre Dameを選択いたしました（その後は、Foyer Mericiに代わる）。以降、奨学生としては30名がカリタス学園賛助会のご

厚意でフランス、アンジェへの奨学金長期留学を果たしています。

この時期にはまた、アンジェ以外のフランス国内の長期・短期私費留学先を探し歩きました。Paris, Rouen, Strasbourg, Royan, Tours, Lyon, Dijon, Amien, Grenoble, Vichy, Brest 等々、フランス各地の語学学校や、大学の付属教育機関などを訪れ、学生たちの語学研修地、短期留学派遣先、ないしは、長期留学先として、とりわけ居住環境を中心に見て廻りました。ネットの普及以前の時代でありましたが、教育機関はもとより住環境は、実際に見てみないと分からないのは今日でも変わりません。とりわけ住居に関しては、セキュリティを中心に、寮の責任者等に具体的な質問もし、留学希望の学生たちや保護者の要望に応えられるように努力いたしました。見学した地には、毎年数名ずつ、多い年は、在籍の学生 30 名のうち 7 名もがフランスに長期留学しておりました。フランスばかりか、スイスやベルギー、そしてカナダに留学する学生がいた年もあります。本学を卒業後に、外国の四年制大学に編入学するものも出てまいりました。

また、在籍中や卒業後に、語学のみならず、料理・製菓、インテリア、デザイン、美容、映画などの専門学校への留学を希望する学生に対してもサポートは同様です。当該の専門学校にもできうる限り、事前に実地見学し、本学からの卒業生の受け入れを交渉したことは言うまでもありません。これらの専門学校で学んだ卒業生は、現在、フランスでその分野で活躍している人たちも数多くいるのです。



留学する学生の壮行会 1987 年
左から樋口先生、筆者、スール・アガタ、ナド神父

継続する学び

カリタス女子短期大学のフランス文学や文化の授業では、中世から現代まで、時代を超えて学ぶことで、あざみ野に居ながらにして、フランス語圏に関する知識を蓄えることができました。本学での授業が、どのように継続されるか、という一例を挙げ、学びは常に継続するものというお話しをしておきましょう。

1 年生の「フランス語圏文化」の授業では、フランスの数ある名画から、学生自ら一枚を選びレポートを書き、発表します。そして、文字通り学生にとっての「一枚の絵」を、フランス語圏にある所蔵する美術館に行き、鑑賞する——そこで完成とする授業でした。自分の「一枚の絵」を見に行くことは、卒業生たちのフランスへの旅の目的のひとつとなりました。時にそれは 10 年後のこともありましたが、観たときに、報告をくれる卒業生が少なからずおります。あざみ野で学んだことは、あざみ野で終わらずに、世界へと一生をかけて繋がっていくのです。

現在フランス語圏のみならず海外に滞在している卒業生は総勢何人になるでしょうか。正確な統計はありませんが、他大学に比して、その人数の卒業生比率はかなり高いのではないかと推測します。留学、就職、結婚など、さまざまな理由で日本を離れ暮らしている彼女たちは、時々にあざみ野を懐かしみ、SNS などで、語り合っています。もちろん、日本を離れていない、まだ「一枚の絵」の出会いの旅にでていない卒業生たちも、これらカリタス生（カリタシエンヌ）は、卒業後の時の流れとともに、「今自分がこうしてられるの

は、あの2年間があったから」、「あんなに勉強した2年間は一生で他にはない」、「溢れるほどの知識を得た」、「映画や絵画や芝居の観方にめざめた」、「読書の面白さを知った」そして、「得た知識が、その後の読書や映画鑑賞に役立った」等々、卒業生からはこのような言葉が、異口同音に、しかも、どの学年からも聞こえてきます。50歳を超えた一期生からも、社会人学生だった70代の方からも、最後の20代卒業生からも。

カリタス女子短期大学という場から発信されるさまざまな企画も、学生たちを外へと向かわせました。たとえば、本学は2001年から、実用フランス語検定の会場校となっていました。仏検の取得は在学中には終わらず、卒業後も受験近くになると、相談や報告が数多く舞い込みます。10年、20年前の卒業生もいます。

こちらは、質問に答えながらも Bonne continuation! と激励の言葉を送るのです。その一方で、在学中に1級を取得した学生もおり、この学生には「学長賞」を授与しました。

また、アンスティチュ・フランセ主催・公益財団法人横浜市芸術文化振興財団共催による「横浜フランス月間」にも、2006年から参加し、あざみ野からフランス文化を発信し続けました。ここにも市民に混ざって、多くの卒業生が参加し、熱心にノートをとっておりました。予定された出会い（パリやリヨンのカリタシエンヌの集い）以外にも、筆者はパリの街角で卒業生とばったり、という経験が何度もあります。同期生ではない、卒業生同士が、フランスや日本の語学学校などで遭遇した、という話もたくさん耳にします。



I.N.A.L.C.O.(フランス)の教え子たちと日本語教員になった卒業生

に応じた灯し方や、松明の掲げ方を模索しつつも、何年も、中には数十年も、火を絶やしていないことを知り、教員としていつも驚かされています。



仏検会場受付 柿崎先生・佐藤先生 2015年



最後のレクチャーコンサート 2016年

ごく最近も、外部の、フランス語の歌のコンクールや文学者マルセル・プルーストの講座で、卒業して20年以上、というカリタシエンヌたちに出会いました。フランス語やフランス文化・文学といったものの種火を受け取った卒業生たちは、自分の暮らしの中で、それぞれの生き方

2004 年から 2012 年までのフランス語・フランス語圏文化コースの機関誌 *Liaisons* をあらためて読み返すと、カリタシエンヌの柔軟性と持続力、そして物怖じしない親和性の高さに気づきます。教壇に立たれた先生方が共通して語るカリタシエンヌの印象です。カリタスで得たのは、フランス語力ではなかったのです。



政治家、セゴレーヌ・ロワイヤルと卒業生 パリで

内なるカリタス

閉学が決まったとき、初代仏語科長のスール・アガタ・ベルニエがいつも呟かっていた言葉、((La Providence travaille))「み摂理ははたらく」を、私も考えるようになりました。

本学の機関誌『学報』(35号、2016年3月)の「panse」にも書きましたが、卒業生の皆さまにとっては、カリタスは閉じていません。形あるものに執着せず、自らの心を強くもって、その心の中に CARITAS を抱くこと、記憶に残し愛おしむべきは、これから成長していく、あるいはつぼみや花を開かせたあなた方自身であるのです。カリタシエンヌとして誇り高く、いつまでも熾火(内なるカリタス)を灯して行ってください。お一人お一人が、それだけの力は身につけたと、教員の一人として信じております。

第 11 章 多様性からの学びあい ー国際ボランティア、海外体験留学、そして国際交流フォーラムー

竹中 豊

外へ広がる知的好奇心、外へとはみ出す行動力、そして異文化からも学びとろうとする開かれた心・・・国際性の基本はこうした点にあるでしょう。カリタス女子短期大学は、当初からこうした目標を掲げ、実践してきました。カリタスだからこそできた語学留学以外のユニークなプログラムを、ここでいくつかふりかえってみましょう。

「国際ボランティア in カナダ」

このプログラムはシスター・ジャックリーヌ・ブリソンの献身的な協力を得て、1999 年から始まりました。そのねらいは、(1)「カリタス」(愛)の精神の実践、(2)報いを求めない奉仕の精神の実践、そして(3)国際的な視野を広げる新たな価値観の創造、にありました。

参加学生は選考のうえ 5 名とし、奨学金が支給されるものです。実施場所は、まず本学のルーツであるカナダのケベック市から始まりました。夏休みの約 3 週間(後に資格取得との関係で 10 日程度に縮小)、学生たちは市内のほぼ中心部にあるケベック・カリタス修道女会の施設に宿泊しながら、同修道院メゾン・マレにて、主に生活貧困者への食事サービス、衣服作業所での修繕、リサイクル用品の区分け作業、耳の不自由な人たちとの共同作業等に従事するものでした。現地の人たちは、一年中このボランティアに従事しています。本学の学生たちは夏の一定期間とはいえ、こうした慈善活動に直接かかわることにより、奉仕の精神の素晴らしさを身をもって体験したと思います。



シスター・ブリソン(ケベック市にて。後ろはセントローレンス川。2014 年)



仕事前の打ち合わせ(メゾン・マレにて。2006 年)

2007年から、今度はオタワ愛徳修道女会およびシスター・リーズ・ラミの理解と協力をいただき、活動場所をカナダの首都オタワに移しました。修道院に宿泊するのは同じですが、活動内容はガラリと変わりました。同修道院と関係のある大きな病院で、主に高齢者のための介護補助活動に従事するものです。現地の若者が夏のこの特別プログラムに参加しており、本学の学生がそれに合流する、と



「お体の調子はいかがですか？」(本部修道院にて。2014年)



お天気がいいので、病院の外で歩行練習のお手伝い
(オタワにて。2009年)

いう形でした。活動内容は、施設利用者との触れ合いを中心に、車椅子での移動の手伝いから、コーヒーサービス、洗濯物の分類まで、多々ありました。とりわけ圧巻は、最終日に実施する施設利用者のための「タレントショー」でした。カリタスの学生は、お揃いの浴衣を羽織りながら歌や踊りを通して、見事に「日本を演じた」のでした。こうした機会を通して、草の根レベルで若い学生同士が意気統合し、友情の輪が広がっていったのも大きな収穫でした。



シスターたちと日本の歌を歌う
(オタワにて。2009年)



オタワ愛徳修道女会院長シスター・ダニエルとともに
(オタワにて。2010年)

このプログラムは必要な科目を履修すると、全国大学実務教育協会から「国際ボランティア実務士」の資格を取得できました。これは、全国の大学・短大ではきわめて希少価値のある資格となっています。

海外体験留学

上記に加え、2010年からは新たな体験留学プログラムが始まりました。カリタスの「愛」の精神の実践という面では、前述のボランティアと同じです。ただ、大きく異なるのは、派遣先がアジア地域であること、実施期間が約1~2ヶ月と長いこと、そして場所・企画などについては参加学生自身が計画をたてておくこと、という点にありました。学内での事前指導はあるものの、基本的には学生の主体性が大いに試される体験留学でした。

派遣国は、中国、フィリピン、インド、タイ、エジプトでした。そのごく一部を紹介しましょう。

中国の場合、(当時の)久山宗彦学長の知人の中国人が内蒙古自治区呼和浩特市(フフホト)市で、大きな幼稚園を運営していました。本学の学生は、園長先生宅にホームステイしながら、園児に日本語・英語・日本文化などを教えるという内容でした。▼フィリピンでは、セブ島にある孤児院にて、子供たちの世話や、貧しさと苦難のなかでもたくましく生きる人たちの支援にかかわりました。▼インドでもやや類似した活動ですが、ここではとくにマザー・テレサの施設(孤児院、重



「さあ、じっとして」。子供の体を洗う
(インドにて。2011年)



子供たちに日本語を教える(インドにて。2011年)

症患者の施設)にて、極貧状態にある人たちのための奉仕活動でした。▼タイでは、学校での寮生活をしながら、文化交流として子供たちに日本語を教えたり、タイ語を学んだりしました。他方で、恵まれない子供たちの生活支援にも従事しました。▼エジプトでは、参加学生がエジプト考古学に関心を持っていたこともあり、カイロ大学の関係者の世話になりながら考古学の研究にあたりました。

こうしたプログラムに参加した学生たちに共通するのは、驚くほどの知的好奇心の高さ、そして精神的・体力的タフさでした。彼女たちは、アジアでの貧困社会の一面に触れながら、あらためて日本の物質的豊さを思い、しかしその一方で、貧しいながらも必死に生きていこうとする孤児たちの姿には、心打たれたにちがいません。



フィリピンのセブ島の子供たちと(2013年)

国際交流フォーラム

最後に「国際交流フォーラム」について少し触れておきましょう。これは1996年から始まった企画で、毎年、11月に実施されました。その内容は、前半が学外の著名なゲスト（その多くは日本語のできる外国人）をお招きして基調講演をお聞きするものです。後半は海外留学体験のある本学学生を中心に、シンポジウム形式でさまざまな異文化体験を語ってもらい、基調講演者を交えてディスカッションを行うというものです。

お招きしたゲストとテーマは実に多様でした。たとえばイラク人ジャーナリスト・ディア氏による、テロの頻発する“イラクの生々しい現状”の報告、カナダ・ケベック大学モントリオール校教授のシュバリエ氏による“北米のフランス文化圏”のユニークな姿の紹介、あるいは、世界の若者や大学との交流に長年携わってきた津田塾大学前学長の飯野先生による、“国際文化交流の現場”からの体験談、等々。



イラク人ジャーナリスト・ディア氏を囲んでのシンポジウム
(2005年)



カナダ・ケベック大学のシュバリエ教授を囲んでの
シンポジウム(2008年)



津田塾大学前学長・飯野正子先生の基調講演
(2014年)

当初、このフォーラムは本学の学内行事でしたが、2010年からは広く市民の皆さんにも公開され、青葉区との「6大学連携事業」との共催となりました。そのため、会場には老若男女・世代を超えた方達が増えたのは幸いでした。このフォーラムを通して、本学が地域社会にも開かれた文化・教養の場として、いささかでも貢献できたのではないのでしょうか。

おわりに

総じて“国際交流”の重要な意義とは、世界の「多様性から学びあうこと」、またその面白さについて再認識していただくことにあるでしょう。すなわち、世界の民族・文化間に優劣はなく「対等」であり、異なることに「価値」が与えられ、そして違いを乗り越えてお互いに「尊重」しあうこと……。こうしたことの今さらながらの再発見であつたらうと思います。



V もうひとつの視座

第12章 カリタス女子短期大学に勤務しての“発見” —公立校との比較の視点から—

阿部 侃壽

カリタス女子短大は、今や英語の中学校教諭二種免許状を取得できる県内唯一の短期大学となっています。こうしたなかで、本学は1997年度から教職科目の担当者として神奈川県立高校の校長経験者を新たに招き、私で五人目となります。結果的に最後となる私は今年で在勤八年目となりました。過去、教職に進んだ卒業生は勿論、それ以外の進路を選んだ人たちにも、現場での経験に裏付けられた授業を通じて、カリタス女子短期大学は学校教育の良き理解者を生み出す貴重な場であったことと考えております。



ところでこの度、記念誌の編集者の方から“公立校と比較して”という副題を頂きましたが、果たして私はその任に相応しいかいささか疑念を抱いております。その理由を述べることからまず始めたいと思います。

私の職歴

私は、大学卒業以来四十年近くの年月を、神奈川県立高校の社会科（世界史で採用）教員として過ごしてきました。以来県立高校の異動は六校になります。その間、教育行政も経験し、最後の九年間は管理職でした。学校の種類も、専門高校、また「県立高校百校計画」に基づいて新設された普通科高校、同じく新設校ながら教育困難校、専門コースのある普通科高校、そして明治時代から続く伝統校と、多種多様な高校に勤務しました。課程も全日制だけではなく定時制のある学校も経験しています。

この勤務経験は、ある意味で時代の特徴を反映しての典型的なものであったと言えるでしょう。そして少子化の波を受けて県立高校の再編統合が進み、私の勤務した六校のうち改編の影響がなく存続しているのは、唯の一枚のみです。この事一つ見ても、公立高校がいかに時代の波の影響を受けるのかを如実に物語っている例になると思います。そして定年退職後にご縁があって、カリタス女子短期大学にお招きを受けて七年が過ぎました。

さて、ここで最初の疑念に帰ると、私は私立の中学や高校に勤務した経験はなく、また、公立の大学に勤務したこともありません。したがって、同じ学校種での、体験を通じての比較が出来ないのではないかと感じております。

それでもあえて体験や伝聞を交えて私立校と公立校を比較してみると、目新しい発見がないわけではありません。そこで、思いつくまま違いとその感想を幾つか書いてみたいと思います。公立学校といっても設置者や学校種によって、また、地域や伝統その他の要因で一口に公立というくくりでは説明しきれないものが多いと思います。私の経験した範囲内においても同じ公立高校でも県立と例えば横浜市立高校とでは、教育環境や条件、教員の雰囲気など、ずいぶんと異なる印象を持っています。川崎市立高校でも又違います。こうしたことから考えると、県内の私立学校は設置者が多種多様であることからしても、

もっと異なることが多く、それこそ千差万別であろうと想像します。

そんな中で、公立の教員に避けられないこととして異動（転勤）があります。私が教員になったころは、全国的に教員の定年や異動も制度化されてなく管理職からの説得に抵抗すれば生涯を一つの学校に勤務でき、八十歳過ぎの現職も存在したと聞いています。私の初任校では、その学校しか勤務したことのない先生が大勢いました。現在は異動の規則もあり、例外はあっても原則一つの学校には十年を超えて勤務することは出来ません。私の例のように幾つかの学校種を経験するのが原則となっています。異動の中には、民間企業への派遣や行政機関への派遣、また慢性的に不足している特別支援学校への異動も含まれます。異動が当然の事としてあるため、公立学校の教員は良く言えば多士済々、悪く言えば玉石混淆で、主義主張を明らかにし時には敵対することも厭わないという教員間の緊張関係もあります。とはいえ、利点として、ある学校で特定の評価を得ても、数年したら異動を希望しリセットできます。私にも、異動後に正反対の異なる評判を聞いて驚いた先生が何人もあります。異動の度に新たに大勢の個性あふれる同僚と教え子を持ち、自己の見聞を広め知識や経験を高められることが公立校の大きな魅力の一つだと思います。

一方、私立学校は異動がなく親密な人間関係が長く保てるために、お互いの信頼関係も深く、日ごろの教育実践にどれほどの良い影響を与えているかははかり知ることが出来ないと思います。教え子にとっても何年経ても恩師が母校にいることの恩恵や安心感は深く、親子が同じ先生に教わるなどということは、今の公立校では望むべくもない私立校の特権でしょう。更に、私立校は建学の精神が明確で具体性に富み、創立者が創立当時のままに敬愛されているということがあるでしょう。公立の学校は、教育目的や学校目標が、おおよそ教育基本法や学校教育法から採用されていて、平等で均質な教育の保証にはなっていますが、学校独自のものを打ち立てるのは難しい側面もあります。そして、県立高校で言うと、文科省、県議会、県教育委員会などからの指導と助言を直接に受ける行政機関としての位置づけもあって、世論や世情の影響がいち早く及びます。これらの事がたとえ必要で止むを得ないものであっても、最近の変化のスピードと内容の多様さに学校現場は苦慮している事でしょう。もしかしたら、私立だって同じだよという意見も有るかもしれません。

カリタス女子短期大学での“発見”

私がカリタスで学んだカトリック精神は、多くの行事の際に見聞してきましたが、とりわけ印象に残っているのが（学生は知らないと思いますが）毎月初めに開催される教授会が「お祈り」によって始まることです。キリスト者であるか否かは関係なく、教授会のメンバーが毎月交代でお祈りを主導します。お一人お一人の教育観、短大や学生に寄せる思いの多様さ、深い教養などが伺われて、私の大きな楽しみとなっています。また、教室ごとに掲げられている十字架や中庭の聖母子像という具象だけではなく、日ごろの教育のなかで実践されているキリスト教の愛と奉仕の教え、こうしたことがすべて、公立校育ちの私にとっては、新鮮な“発見”であり、かつ行事の度ごとに感慨を新たにしてきました。小規模の大学として、教職員同士や学生との距離も近く、文字通り人間的な交わりを交わすことが出来ています。私の職業人生の最後に、カトリック系の短期大学で教鞭をとることが出来た事を、私は奇跡のように感謝しております。宗教的信仰に裏付けられた人間教育は、公立校では望むべくもありません。

公立校と私立校のこれから

最近の教育改革のうち、中等教育だけ見ても、例えば中高一貫教育、高大連携、少人数指導、海外への研修や修学旅行など、私立校が先行して実施して公立校が後を追っていることが沢山あります。これらは、私立校からの刺激を受けて公立校が改革を行っている例ですが、当然に逆のことも多いと思います。公立校と私立校とどちらがより良い教育が可能かは、正答などはないと思いますが、この中等教育での実践の例のように、公立校と私学とが現実の学校運営の中で、お互いに切磋琢磨してゆくことが、日本の学校教育にそれぞれ貢献してゆく事と思います。

明治以降の欧米先進国に追いつき追い越せという国策が、現在の初等及び中等教育は公立、高等教育の大半は私学が担うという構図のルーツであると思います。画一的ではあるけれども公平で平等な国民を育成するためには強力な教育行政に基づく公立校が、そして国際化また経済が低迷する世界にあって従来にも増して自由で柔軟な発想と行動力が必要とされるなら、高等教育は私学がという分担は、もしかしたら将来性のある正しい方向かもしれないと考えています。

こうした中であって、カリタス女子短期大学は大変残念ながらその役目を終えますが、高等教育のバックボーンとしてのカトリック精神は、これからも生き続けるでしょう。なぜならば、国際化や個性重視の教育環境の中にあって、従来にも増して人間性豊かで、多様な感受性に満ちた青少年を育成するというミッションは、普遍的価値を持っていると考えるからです。



社会人入学・科目等履修生を含む最後の教員免許状を取得した皆さんと(2016年3月)
右から2番目、前田隆子先生



VI カリタス女子短期大学 50 年の あゆみ

1. 短大のあゆみ

西 暦	和 暦	沿 革
1960	昭和35	学校法人カリタス学園設立
1964	昭和39	カリタス女子高等学校専攻科（英語科）開設
1966	昭和41	カリタス女子短期大学（英語科）開学 1期生48名入学 専攻科は発展解消 クリスマス会 中野島修学院聖堂にて実施
1968	昭和43	『カリタス叢書』第1号発行 （1981年に『研究紀要CARITAS』と改称）
1969	昭和44	長野県四阿高原に「カリタス山の家」完成
1970	昭和45	カリタス学園創立10周年記念式典 ESS英語劇公演（以後カリタスフェア、あざみ祭で公演）
1972	昭和47	「静かに考える会」開始（中野島修学院） 第1回カリタスフェア（大学祭）開催（1980年まで）
1974	昭和49	アメリカ ルイス大学との留学協定締結
1976	昭和51	横浜市緑区（現青葉区）あざみ野に土地購入 アメリカ ルイス大学に初の奨学生を派遣（英語科）（1998年まで）
1978	昭和53	米国研修旅行実施
1979	昭和54	米国研修旅行実施
1981	昭和56	横浜市緑区（現青葉区）あざみ野に短期大学移転 カリタス学園創立20周年記念式典・短大校舎落成式典挙行 米国研修旅行実施 『学報』創刊号発行
1982	昭和57	第1回球技大会（現スポーツデイ）開始 オリエンテーション・キャンプ（現オリエンテーション親睦旅行）開始
1983	昭和58	仏語科設置（入学生25名）英語科定員100名に変更 第1回「あざみ祭」（大学祭）開催 「静かに考える会」（世田谷区若林 野菊の家）
1984	昭和59	カナダ研修旅行実施
1985	昭和60	カリタス学園創立25周年記念式典 夏期ヨーロッパ研修旅行開始 濱尾文郎司教様全学講演会開始（隔年） 「秘書士」認定証取得コース設置
1986	昭和61	フランス アンジェ・西部カトリック大学との留学協定締結
1987	昭和62	「ヨコハマ街かど緑賞」（財団法人横浜市緑の協会）受賞、 アンジェ・西部カトリック大学へ初の奨学生を派遣（仏語科） 受験生対象進学説明会開始
1988	昭和63	一般社会人向け「プティ・コレッジ」開始
1989	平成1	横浜市民大学講座開始（2004年以降は「カリタス女子短期大学市民講座」） 帰国生徒特別選抜開始
1990	平成2	聖マルグリット・デュービル列聖式 カリタス学園創立30周年記念式典 社会人特別選抜開始
1991	平成3	制服廃止 この年度の卒業生より「準学士」称号
1992	平成4	『シラバス』（授業要項）作成 「静かに考える会」（伊豆 天城山荘） アメリカ 聖エリザベス大学との留学協定締結
1994	平成6	全学講演会開始 司教様による講演会との隔年開催となる 短期派遣奨学生制度（英語科・仏語科）開始
1995	平成7	英語科と仏語科を改組転換し、言語文化学科1学科3専攻（英語・英語圏文化専攻、仏語・仏語圏文化専攻、コミュニケーション文化専攻）を設置
1996	平成8	カナダ マギル大学に奨学生を派遣（コミュニケーション文化専攻）（99年よりクイーンズ大学に変更） 国際交流フォーラム開始
1998	平成10	ホームページ（仏語・仏語圏文化専攻）開設 研究休暇制度開始 かながわ大学生涯学習推進協議会設置加盟、社会人のための大学フェア（現生涯学習フェア）参加開始

西 暦	和 暦	沿 革
1999	平成11	イギリス ウィラルメトロポリタン大学、リバプールホープ大学に奨学生を派遣（英語・英語圏文化専攻）/ チェスター・カレッジを中心とした海外教育機関（Global College Network）との大学間協定による奨学生の派遣開始（三専攻）/ 「国際ボランティアinケベック」開始（2004年から「国際ボランティアinカナダ」） ホームカミングデー実施 カリタス学園創立40周年に向けて「カリタス年」オープニング 対話型自己推薦制度導入
2000	平成12	学園創立40周年記念式典「カリタス年」クロージング ホームページ開設 英語・英語圏文化専攻「ブリティッシュヒルズ体験学習」開始
2001	平成13	英語・英語圏文化専攻機関誌 <i>Kaleidoscope</i> 発行開始
2002	平成14	マスメディア研究Ⅰ『キャンパスプレス』発行開始 マスメディア研究Ⅱビデオ作品作成開始
2003	平成15	オープンカレッジ「海外研究シリーズ」開始 オーストラリア 南クイーンズ大学との留学協定締結 『相互評価報告書』発行（長野 清泉女学院短期大学）
2004	平成16	「国際ボランティア実務士」の導入（コミュニケーション文化専攻） 仏語・仏語圏文化専攻機関誌 <i>Liaisons</i> 発行開始 『自己防衛ハンドブック』配布開始 「健康教育セミナー」開始 県立高校へのフランス語出張授業 外国人留学生奨学金制度・私費外国人授業料減免制度導入 『平成15年度自己点検評価・報告書』発行（以後2010年度まで発行）
2005	平成17	横浜市 大学・都市パートナーシップ協議会設立加盟 コミュニケーション文化専攻機関誌 <i>Communication.jp</i> 発行開始 この年度の卒業生より学位「短期大学士」授与 FD活動「教育の研究」発足
2006	平成18	「横浜フランス月間」参加「フランス語であそぼ」実施 「よこはま学☆遊フェア」（2009年まで開催）参加 短期大学あざみ野移転25周年記念 第10回国際交流フォーラム開催 アメリカ フェリシアンカレッジとの留学協定締結
2007	平成19	「ノーベル平和賞受賞者 シリン・エヴァディさんとの対話」開催 「よこはま大学リレー講座」に参加
2008	平成20	（財）短期大学基準協会による第三者評価（認証評価）実施、「適格」の認定を受ける 言語文化特別講座「アラブの世界、そこが知りたい ～言語と文化を通して～」開催 ボランティア奨励費による「カンボジアスタディツアー」参加開始
2009	平成21	言語文化学科3専攻制から4コース制（英語・英語圏文化コース、仏語・仏語圏文化コース、現代コミュニケーションコース、社会文化システムコース）に移行 神奈川県総合学科高等学校長協会との教育交流に関する協定締結 「高大連携夏季総合講座」開始 横浜フランス月間参加 講座「フランスを知る」開催（以後毎年参加）
2010	平成22	カリタス学園創立50周年記念式典、ケルメス・カリタス実施 「学園50周年記念市民講座」開催 「キャリアデザインセミナー」導入 「青葉区内各大学と横浜市青葉区との連携・協力に関する基本協定」締結 アメリカ メリルハースト大学、イギリス ニューカレッジノッティンガム、ギルフォードカレッジとの留学協定締結 海外体験留学制度開始
2011	平成23	短期大学あざみ野移転30周年記念 第15回国際交流フォーラム開催 ビジネス演習・デジタル製本『フリーペーパー』発行開始
2012	平成24	ヨコハマ大学まつり 参加開始 東日本大震災 被災地ボランティア活動実施 カリタス女子短期大学・桐蔭横浜大学桐蔭生涯学習センター共同公開講座「幸せの国ブータンの魅力 ～小国のアイデンティティから学ぶもの～」開催 横浜ライブラリーカフェ参加
2013	平成25	東日本大震災 被災地ボランティア活動実施 平成27年度募集停止を発表 横浜ライブラリーカフェ参加
2014	平成26	映画「ももいろそらを」上映会（本学学生が主演した映画）とトークショー開催 青葉6大学まつり参加開始 青葉区制20周年記念青葉区制功労者としてベルニ工学長表彰される 専攻科・短期大学設立50周年記念ホームカミングデー実施 現代コミュニケーションコース・社会文化システムコース共同機関誌 <i>Communication/SCS.jp</i> 発行開始 山内図書館講座参加 ベルニ工特別奨学金制度導入
2015	平成27	平成27年度募集停止
2016	平成28	カリタス女子短期大学創立50周年記念式典開催

2. 本学の教育研究活動 テーマ (*は文部科学省採択制補助金で採択されたもの)

- 1989 「建学の精神に基づくキリスト教教育を深めるための教育活動計画」 (*「特色ある教育研究」1989-1997 採択)
- 1992 「国際的視野にたつ口語フランス語教育の研究」 (*「特色ある教育研究」1992 採択)
「国際的視野に立った日本文化・日本語教育の研究」 (*「特色ある教育研究」1992-1994 採択)
「生涯学習体系の深化・充足のための教育活動計画」
「マルチカルチャリズム (多文化理解) を背景とした実践的・個別化英語教育」
- 1993 「マルチカルチャリズム (多文化理解) に対応するコミュニケーション能力を伸ばす外国語教育」 (*「特色ある教育研究」1993-1996 採択)
- 1996 「相互理解に基づく異文化間コミュニケーション教育の研究」 (*「特色ある教育研究の推進」1996-1999 採択)
- 1997 「マルチメディアを能動的に利用する英仏二言語学習についての研究」 (*「特色ある教育研究の推進」1997-2000 採択)
- 1999 「豊かな人間性と心を育むための学外研修合宿」 (*「特色ある教育研究の推進」1999-2006 採択)
- 2000 「情報化・国際化時代のコミュニケーション能力を高めるための教育研究」 (*「高等教育研究改革推進費」2000-2003 採択)
- 2001 「英仏二言語学習におけるコンピュータ支援語学教育についての研究」 (*「高等教育研究改革推進費」2001-2004 採択)
- 2003 「豊かな心と人間性を育むための教育プログラム」
- 2004 「国際ボランティア活動への関わりと実践教育の研究 ー良質なヒューマン・コミュニケーションを求めてー」 (*「大学教育高度化推進特別経費」2004-2007 採択)
- 2005 「対面型授業とマルチメディアを活用した授業の相乗効果による語学教育 ー多様化する学生への対応ー」 (*「大学教育高度化推進特別経費」2005-2008 採択)
- 「英語力強化プログラム “Stepping-stone to Success” Program」
- 2007 「競争相手ではなく、分かち合いの他者を見ようとする問題意識と、それを具体化する体験学習」 (*「教育・学習方法等改善支援」2004-2008 採択)
- 「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム：キャリア・ウーマンへの再挑戦」
- 2008 「国際ボランティア活動への関わりと実践教育の研究 ーカナダにおける高齢者・障がい者の介護補助を中心としてー」 (*「教育・学習方法等改善支援」2008-2010 採択)
- 「対面型授業とマルチメディアを活用した授業の相乗効果による語学教育 ー多様化する学生への対応ー」 (*「教育・学習方法等改善支援」2008-2010 採択)
- 2009 「大学生の就業力育成支援事業：キャリアデザイン・ツリー at カリタス」

3. 全学講演会 テーマ

1985	「アジアの中の日本」	濱尾文郎	横浜教区長
1987	「アジアの中の日本」	濱尾文郎	横浜教区長
1989	「アジアの中の日本」	濱尾文郎	横浜教区長
1991	「アジアの中の日本」	濱尾文郎	横浜教区長
1993	「アジアの中の日本」	濱尾文郎	横浜教区長
1994	(不詳)	林 昌正	横浜市視聴覚障害者福祉協会会長
1995	「アジアの中の日本」	濱尾文郎	横浜教区長
1996	「女性と政治」	沢 光代	逗子市長
1997	「アジアの中の日本」	濱尾文郎	横浜教区長
1998	「美しい地球を子供たちに (今、女性の役割は)」	小浜由美子	ネットワーク地球村講師
1999	「生と死を見つめて・心の時代、新世紀に向かって」	松原 哲明	港区龍源寺 住職
2000	(不詳)	梅村昌弘	横浜教区長
2001	「生きがい・愛・ユーモア」	アルフォンス・デーケン	上智大学名誉教授
2002	「愛を生きる・カリタスの道」	梅村昌弘	横浜教区長
2003	「皆さんへのメッセージ」	中田宏	横浜市長
2004	「いのちへのまなざし」	梅村昌弘	横浜教区長
2005	「キリスト教文化の常識」	石黒マリーローズ	英知大学教授
2006	「神に似せて創られた人間」	梅村昌弘	横浜教区長
2007	「カリタス女子短期大学の教育理念と世界の飢餓」	ピセンテ・ボネット	上智大学名誉教授
2008	「いのちへのまなざし」	梅村昌弘	横浜教区長
2009	「歌って学ぶ信仰ー言葉と音楽をめぐってー」	新垣壬敏	白百合女子大学教授
2010	「学園創立50周年にあたって」	梅村昌弘	横浜教区長
2011	「女性の生き方〜市長から学生へのエール〜」	林 文子	横浜市長

2012	「カトリック学校で学ぶ意義」	梅村昌弘	横浜教区長
2013	「人によって迫害され、人によって救われる」	久郷ボンナレット	元ボルボト政権下難民
2014	「カトリック学校で学ぶ意義」	梅村昌弘	横浜教区長
2015	「『自分ごと』からはじめよう！～生きづらさ、働きづらさを抱える若年女性の事例から～」	飯島裕子	フリーライター（本学卒業生）

4. 国際交流フォーラム テーマ

※1995年に言語文化学科に改組転換し、学科の行事として「国際交流フォーラム」が開催され、内外の著名人による基調講演が行われた。

1996	「日本と日本語との出会い」（フォーラムテーマ：不思議の国体験）	クローデット・ベルニエ	本学学長
1997	「言葉とコミュニケーション：『誤解』をめぐって」	末永 恵	産経新聞外信部記者
1998	「文化摩擦を超えて」	植田禮子	駐日カナダ大使館
1999	「異文化のなかの自分探し」	内海愛子	恵泉女学園大学教授
2000	「国境の壁をこえて ～さまざまな出会い」	新井裕子	シドニーオリンピック・フェンシング日本代表
2001	「女性の視点からみた国際社会」	堀川真理子	読売新聞記者
2002	開催なし		
2003	「よりよいコミュニケーションに向けて ―日本人は本当に話下手なの？―」	荒木晶子	桜美林大学教授
2004	「アフリカ・ルワンダの悲劇から学んだ教育の大切さ」	カンベンガ・マリー・ルイーズ	ルワンダの教育を考える会 副理事長
2005	「近い将来、イラクに平和が訪れるであろうか」	キデル・ディア	イラク人ジャーナリスト
2006	「カナダと日本の関係」（あざみ野キャンパス 25 周年記念：カリタスとカナダ）	クリスティーン・ナカムラ	駐日カナダ大使館参事官
2007	「国際文化交流とは何か」	カラム ハリール	エジプト大使館参事官
2008	「北米におけるフランス語文化圏文化：ケベックの魅力」（ケベック創設 400 周年記念）	マルク・シュヴリエ	ケベック大学モントリオール校 教授
2009	「国境を越えた学生交流の現場から」	水戸孝道	早稲田大学教授
2010	「日本は本当に国際化しているか」	アベベ・ザウゲ	アデヤベバ・エチオピア協会 理事長
2011	「ワクワクする大陸、アフリカ」（あざみ野キャンパス移転 30 周年記念）	ムサ・モハメッド・オマル・サイード	元駐日スーダン共和国大使
2012	「カナダ極北の人々 ―そのライフスタイルと文化―」	スチュアート ヘンリ	前放送大学教授
2013	「ミャンマーの社会と文化 ―親日的で敬虔な仏教国」	田島高志	元駐ミャンマー日本国特命 全権大使
2014	「国際交流の目指すもの ―日本の若者は内向きか？」	飯野正子	前津田塾大学学長
2015	「国際交流 For What? ―多様性から学びあう―」	竹中 豊	本学教授

5. 静かに考える会 テーマ

※「静かに考える会」は 1972 年より開始。最初の中野島のカリタス修学院、その後、世田谷区若林の野菊の家、そして伊豆の天城山荘にて実施された。1992 年から下記のテーマで実施。クリスマス会と共通テーマを掲げることもあった。

1992 年	「隣人と私、私と隣人（隣人とは誰か、私とは誰か）」
1993 年	「共生・共存するカリタス」
1994 年	「一人は皆のため、皆は一人のため」
1995 年	「愛は活きている」
1996 年	「知らない世界に眼を向ける。私が変わる、世界が変わる」
1997 年	「平和の祈念」
1998 年	「深く触れる、自分、隣人、いのち」
1999 年	「新たな世紀に目を向けて、あたらしい眺望を求める」
2000 年	「呼ばれています・・・気づいていますか」
2001 年	「痛みを越えて真実の平和を―あなたは何ができますか―」

2002年	「常識のむこう・・・光！」
2003年	「偉大なちから・・・S.G. (Something Great)」
2004年	「いのちは・・・プレゼント！」
2005年	「カリタスの道・私たちの歩み・私の歩み」
2006年	「ネット・つながり」
2007年	「カリタスのところを生きる・隣人となる」
2008年	「夢を実現しよう―心の奥深いところの声を求めて―」
2009年	「CARITAS50・愛をはこび、伝える」
2010年	「CARITAS50・愛をはこび、伝える」(2009年と同じ)
2011年	「逆境を乗り越える連帯感～サポートを求めサポートを与える～」
2012年	「私のいのちとそして生きること ～生存と食を見つめ～」
2013年	「奉仕と祈り ～生きる力・愛する力・信じる力～」
2014年	「受け継いでカリタス・普遍的愛」
2015年	「CARITAS ー愛・心からありがとうー」(あざみ祭、クリスマス会と共通テーマ)

6. クリスマス会 テーマ

※クリスマス会は開学当初より行われた。1988 から下記のテーマで実施。

1988	ー Enjoy, Share, Pray ー
1989	「クリスマスに幸せはこんなかたちでやってくる」
1990	「君に会いたいクリスマス」
1991	「世界の平和を祈ってメリー・クリスマス」
1992	「隣人と私、私と隣人」
1993	Sharing with Joy
1994	「一人は皆のため、皆は一人のため」
1995	「愛は活きている」
1996	「知らない世界に眼を向ける。私が変わる、世界が変わる。」
1997	「来て、見なさい。クリスマスの”しるし”！」
1998	「クリスマス、偉大な・・・S.G. (Something Great)」
1999	「クリスマス’99・新しい世紀への眺望を求めて」
2000	「呼ばれています・・・気づいていますか」
2001	「痛みを越えて真実の平和を」
2002	「常識のむこう・・・光！」 Beyond our Awareness …look for the Light! Au delà du bon sens … la Lumière! 」
2003	「ねむっている命・・・めざめて 生きて！」
2004	「いのちは・・・プレゼント」
2005	「カリタスの道・私たちの歩み・私の歩み」
2006	「ネット・つながり」
2007	「カリタスのところを生きる―隣人となる」
2008	「夢を実現しよう ―心の奥深いところの声を求めて―」
2009	「カリタス 50 愛をはこび、伝える」
2010	「カリタス 50 愛をはこび、伝える」(2009年度と同じテーマ)
2011	「逆境を乗り越える連帯感～サポートを求め、サポートを与える～(地震年)」
2012	「ともに祈り、学び、仕えあう」
2013	「奉仕と祈り ～生きる力・愛する力・信じる力～」
2014	「受け継いでカリタス・普遍的愛」
2015	「CARITAS ー愛・心からありがとうー」(静かに考える会、あざみ祭と共通テーマ)

7. あざみ祭 テーマ

※「あざみ祭」(大学祭)はあざみ野キャンパスに移転後始まる。中野島キャンパス時代の大学祭は「カリタス・フェア」と称した。

1983	「望むこと、それはできること」	“Vouloir, c'est pouvoir. / Where there is a will, there is a way.”
1984	《MUGEN》	
1985	「元気核」	
1986	「COMMUNICATION -その心がつながる時-」	
1987	「Becoming - 自己の洗練 - Devenir 」	
1988	“Vivant, Vivacious, 生き生きと・・・”	
1989	「ばく -夢を食べよう- 」	
1990	「Advancing -新しい可能性に向けて前進- Allons De L'avant 」	
1991	“Peekaboo!” (イナイイナイバー)	
1992	Girls, Be Ambitious!	
1993	「百花繚乱」	
1994	「千紫万紅」	
1995	「暴暴祭 ~VIVE CARITAS~」	
1996	「やります!カリタス! 21世紀にむかって」	
1997	「成せば成る」	
1998	「To Follow Your Dream -夢を追う-」	
1999	「Yes, 世紀末 1999」	
2000	「西暦前進 2000 → 新 ~」	
2001	Tbi et Moi ~ not alone~	
2002	「Love & Peace -あざみなでしこ」	
2003	「変幻自在」	
2004	「平和・サラーム ~世界に目を向けて~」	
2005	「~美 ing~」	
2006	「希望 -HOPE・ESPOIR-」	
2007	「情熱」	
2008	「きずな」	
2009	「ハーモニー」	
2010	「スマイル 50」	
2011	「カリタスなう -今、私たちにできること-」	
2012	「Dream ~夢は必ずかなうと信じて~」	
2013	Sparkle, Sparkle, Forever!	
2014	「翼 ~私たちははばたく~」	
2015	「CARITAS -愛・心からありがとう- (静かに考える会、クリスマス会と共通テーマ)	

8. スポーツデー テーマ

※1982~1984は「球技大会」、1985~1988は「スポーツ大会」として中野島キャンパスにて実施。1989からは、「スポーツデー」と名称変更し、あざみ野キャンパスで実施。2004からはテーマを掲げている。

2004	「カリタンピック 2004」	
2005	「カリタンピック 2005」 円陣パス大会、綱引き他	
2006	「カリタスカップ 2006 ~No Border~」 カリタス体操他	
2007	「CARITAMPIC カリタンピック 2007」	
2008	「CARITAMPIC カリタンピック 2008」 バレーボール他	
2009	「カリスポ NEO」 バレーボール バドミントン バasketボール ドッジボール 雑巾リレー	
2010	「カリタス運動会」 バレーボール バasketボール ドッジボール 借り物競争 大縄	
2011	チーム WITH 参加 エスケープ、ヨガ、手つなぎ鬼、ハンカチ落とし、ドッジボール、バレーボール	
2012	「コースを超えて深めよう絆!」 チーム WITH 参加 バレーボール、大縄、手つなぎ鬼、玉入れ、他	
2013	「Let's Enjoy with WITH」 チーム WITH 参加 バレーボール、Basketボール、じゃんけん列車、他	
2014	「初あおば6大学参加!! カリタスワールドカップ」 あおば6大学学生参加 借り物競争、ドッジボール、ズンバ 他	
2015	「FINAL! スポーツ&パーティ!」 あおば6大学の学生参加 バドミントン、ソフトバレーボール	

9. 健康セミナー テーマ

2004	「女性と健康」	小川朋子	聖母大学
2005	「心の健康について」	阿部恵一郎	創価大学教授
2006	「女性と健康—タバコの害からあなたの健康を守ろう—」	永井しづか 川上洋子 小森亜矢 浪川きよ子	横浜市青葉区福祉センター医師 横浜市青葉区福祉センター保健師 横浜市青葉区福祉センター保健師 漫画家
2007	「自分を知ること、自分を大切に思うこと」	曾根美恵	青山心理発達相談室臨床心理士
2008	「婦人科検診を受けよう！」	横山和彦	昭和大学藤が丘病院産婦人科講師
2009	「良好な対人関係を築く—自分を知り、他者を知る—」	曾根美恵	青山心理発達相談室臨床心理士
2010	「あなたが守る 大切なあなたの心とからだ」	辻 弘枝	CAP かながわ理事長
2011	「人との交流パターンを理解する」	曾根美恵	青山心理発達相談室臨床心理士
2012	「婦人科疾患と検診」	横山和彦	昭和大学藤が丘病院産婦人科准教授
2013	「自分を知り、自分を活かす」	曾根美恵	青山心理発達相談室臨床心理士
2014	「女子大生が知っておくべき産婦人科の知識」	土居大祐	日本医科大学武蔵小杉病院 女性診療科・産科講師
2015	「自分を知り、より良い対人関係を築く」	曾根美恵	青山心理発達相談室臨床心理士

10. 市民講座 テーマ (*2010年以降は海外研究シリーズと隔年で開催)

1989	「文化のトライアングル—異文化と日本を考える—」
1990	「グローバリズムのなかの固有文化」
1991	「ドキドキする女たち」
1992	「痛み」
1993	「クニ・都市・まち—新しいアイデンティティの模索—」
1994	『音』—言葉の“響き”から風景の“サウンド”まで—」
1995	「エレガントな言語文化? : 『ことば』と『ひと』との唐草文様」
1996	「インター・・・?」
1997	「創る: 人のイマジネーションから神の創造まで」
1998	「カリタスにおけるフランス年」
1999	「コミュニケーション文化をめぐる10章: 21世紀型社会の愉しみ方」
2000	『英語世界へのいざない』—ことば・文学・文化・社会の万華鏡— An Invitation to the World of English—」
2001	「フランスへの誘い—Invitation à la culture française—」
2002	「ちょっと変なうかん —文化«くうかん»から折り紙の数理まで—」
2003	「日本人と英語 “English as Perceived by the Japanese People” 」
2004	「パリ」—その多面性を読み解く—
2005	「コミュニケーションはどこまで可能か —“誤解”から“相互理解”まで—」
2006	「日本人と英語 Part 2」
2007	「フランスの女性たち」(Femmes françaises)
2008	「イメージの作られ方 —ホンモノとニセモノの狭間で—」
2010	「カリタス学園創設50周年記念 多文化共生を語る —国境を越えた視点から—」
2012	「Beauty・美・Beauté」
2014	「旅 —歴史の旅からジャズの旅まで—」
2015	「さまざまな最終講義 —カリタスにおける教育と研究活動の彩り—」

11. 海外研究シリーズ テーマ (*2010年以降は市民講座と隔年で開催)

2003	「カナダ研究講座」
2004	「中東との対話」
2005	「北アメリカのフランス —ケバックの顔、そしてジャポニー—」
2006	「欧米とアラブ、日本とアラブの対話」
2007	「音楽と言葉」
2008	「物質的貧困と福音的貧しさを通して、真の平和を考える」
2009	『危機』にどう対応したか: 国・地域に事例を探る —経済から民族的アイデンティティの危機まで—」
2011	『笑い』: その比較文化 —諷刺からユーモアまで—」
2013	「創造と激動の両大戦間期」

12. 横浜フランス月間 テーマ

2006	「フランス語であそぼ」
2009	「エッフェル塔から見えるもの」
2010	「パリをめぐるシャンソンの数々」
2011	「十八世紀フランス人の感性について ―涙の世紀― 」
2012	「フランスの調べ ―それぞれのパリ― 」
2013	「ヴェイユ家の物語」
2014	「パサージュのあるパリ」
2015	「レクチャーコンサート 2015」
2016	「レクチャーコンサート 2016」

執筆者紹介

★ クローデット・ベルニエ

本学学長。前カリタス学園理事長。カナダ・ケベック州出身。ケベック・カリタス修道女会シスター。主な論文に「今日のマルグリット・デュービル」等。

★ 北川 宣子（きたがわ のりこ）

本学教授。学科長。専門は英語教育。主な著書は、*English for Manners and Hospitality III*, 『秘書概論－これからの企業秘書・国際秘書へ向けて－』など。外資系企業にてジェネラル・マネジャー秘書としての勤務経験あり。日本国際秘書学会理事。一般社団法人日本秘書協会認定講師。

★ 稲葉 延子（いなば のぶこ）

本学教授。図書館長。専門はフランス思想。主な編訳書に『シモーヌ ヴェーユ その劇的生涯』、『アンドレ・ヴェイユ自伝』、『アンドレとシモーヌ ヴェイユ家物語』など。フランス歌曲を中心としたレクチャーコンサートのレクチャーを数多く担当。公益財団法人フランス語教育振興協会(APEF)評議員。

★ 竹中 豊（たけなか ゆたか）

本学教授。専門はカナダ研究。主な著書・訳書に『カナダ 大いなる孤高の地』（カナダ首相出版賞受賞）、『ケベックとカナダ 地域研究の愉しみ』、『多文化社会ケベックの挑戦』（共訳）、『ケンブリッジ版カナダ文学史』（共訳）など。日本カナダ学会理事。

★ 浦野 洋司（うらの ようじ）

本学教授。キリスト教文化部長。専門は旧約聖書。主な著書、訳書は『ヨエル書、アモス書、オバデヤ書、ヨナ書、ミカ書、ナホム書、ハバクク書』『イザヤ書』『聖霊に満たされて』など他。日本聖書協会『新共同訳』の新翻訳事業、翻訳編集委員（旧約部門）。

★ 阿部 侃壽（あべ なおひさ）

本学教授。専門は教育学。「教育原理」、「教職入門」、「学校経営の研究」等の教職科目担当。元神奈川県立高等学校長。元中央教育審議会教育課程部会専門委員。

★ 伊藤 知子（いとう ともこ）

本学准教授。学生部長。専門は、イギリス文学、特に19世紀イギリス小説、詩。著書は『ピーター・ミルワードの世界』（共著）、『英語・英米文学の視座』（共著）、論文は「Hardy の小説における Shelley の影響」など。

★ 加藤 美保（かとう みほ）

本学事務長。前「かながわ大学生涯学習推進協議会」の小委員長。（財）短期大学基準協会の第三者評価において、カリタスのALO（Accreditation Liaison Officer：第三者評価連絡調整責任者）を務める。

★ 小林 順子（こばやし じゅんこ）

清泉女子大学名誉教授。専門はフランスおよびカナダ・ケベック州の教育政策・制度の研究。主著に『カナダの教育1 ケベック州の教育』、『カナダの教育2 21世紀にはばたくカナダの教育』（共著）など。日本カナダ学会名誉会員。

<編集後記>

- ▲神さまは時にはいたずら好きなのですね。でも、「御摂理」に従います。皆さんには感謝を、そしてカリタスには称賛の心を込めつつ、この冊子を捧げます。(竹中)

- ▲本記念誌の発行に漕ぎつけたことをとても嬉しく思います。執筆にあたり、本学に関わった30年間の教育や活動を振り返ることができ、思い出に浸る貴重な時間が持てました。特に、編集委員長を務めてくださった竹中先生には、感謝の意を表したいと思います。(北川)

- ▲皆さまは、この冊子をいつ手に取られたでしょう。2016年10月16日、あるいはその後でしょうか？10年、20年後でもぜひ読み返してください。皆さまが、「カリタシエンヌとして誇らしく日々を重ねていく」、その心の糧になることを願っております。(稲葉)

- ▲写真や記録を紐解いて歴史を振り返る作業は、その重みを感じつつも、とても楽しいひと時でした。<CARITAS>の精神が生き続けている本学の50年を、皆様にも感じていただければ幸いです。(加藤)

カリタス女子短期大学の50年を振り返って

2016年10月16日 発行

発行：カリタス女子短期大学

〒225-0011 横浜市青葉区あざみ野 2-29-1

電話 045-901-5133 FAX 045-901-5066

e-mail : caritas@caritas.ac.jp

編集：カリタス女子短期大学 50周年記念誌 編集委員会

印刷：キンコーズ・ジャパン株式会社

編集委員：竹中 豊（*委員長）

北川 宣子

稲葉 延子

加藤 美保

編集協力：内田 香織



CARITAS

カリタス女子短期大学
